魔法先生ネギま！？　～願い事は叶えられますか？

綺羅 夢居

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま!?　～願い事は叶えられますか？

【Ｎコード】
Ｎ３０７３Ｙ

【作者名】
綺羅　夢居

【あらすじ】
これはネギまの世界で生きることになった主人公と同じようにネギまの世界で生きることになったオリキャラ達の話しです。（注意）原作キャラに対するアンチ表現があります。原作ブレイクもします。それが許容できない方はお戻りください。現在アンケート中、詳しくはあとがきにて

プロローグ（前書き）

始めまして、綺羅　夢居といいます。

自分は就活生ですが、急に投稿したくなり、書き始めました。

どうかよろしくお願いします。

プロローグ

目が覚めたらそこは知らない部屋だった。

とりあえず事態が呑み込めないので起き上がろうとすると両腕に違和感があった。

まず自分の左腕を見ると点滴の針が刺さっており、右腕には包帯が巻かれていた。

この時始めて鼻を衝くような薬品の匂いを自分の姿の着ている病人服を見てここが病院だとわかった。

（どうしてケガしてるんだ？）

昨日はバイトが終わったあとは家帰りシャワーを浴びてすぐに寝たはずだった。

それなのになぜ自分は病院にいるのだろう、そして気がついたことがもう一つ、

（身体が幼い……？）

そう身体が幼いのだ。自分の身体が明らかに縮んでおり、腕も柔らかく、大人のような筋張った腕ではない。

全く事情が呑み込めないのでとりあえずナースコールを押すことにした。

ナースコールをすぐに看護師さんと担当医であろう人がやってきた。

担当医はまず身体に異変はないかと聞いてきたので身体が少し痛いですと答えた。

すると担当医は全身に軽い打ち身と少し擦り傷があると教えてくれた。

それから担当医は次々と質問をなげかけてきた。

「自分の名前は言えるかな?」

「司条(しじょう)　涼(すずみ)です」

「うん、よく言えたね。じゃあ歳はいくつかな?」

名前はこれで良いらしい、ただ身元がわからないだけかもしれないが。

そして年齢を聞かれる。恐らくだが正直に答えるとマズいように思う。

少し黙っていると、急にガラッという音とともに病室の扉が開く。

そちらの方に目を向けるとそこにはメガネをかけた男性が立っていた。

「すみません、司条涼くんが目を覚ましたと聞いて来ました」

どうやら、自分の関係者らしいが記憶を探しても男性のような知り合いはいない。

担当医が男性に近づくといくつか言葉を交わし、看護師とともに病室を出て行った。

男性は自分に近づくといくつか声をかけてくる

「よかった、ケガはそれ程酷くはないようだね」

「あの、」

「ん？どうしたんだい？」

「誰、ですか？」

俺がそう言うと男性は少し焦ったように問い掛けてきた。

「ぼ、僕のことを覚えてないのかい」

「はい」

恐らく親などではないのだろう。

「えと、司条涼くんは名前は覚えているよね？」

「はい」

「なら、どうして入院しているのかわかるかな？」

「……ごめんなさい、わかりません。あのどうしてですか？」

なぜ入院しているのかわからないので正直に答え、理由を聞く。

すると男性は少し気まずそうにしながらも教えてくれる。

「君は事故に巻き込まれたんだよ」

「事故、ですか？」

「ああ、その様子だと事故の時のことは覚えてないみたいだね、僕のことも覚えてないかい？」

「……すいません」

「いや、謝る必要はないよ、ただ後でちゃんと検査を受けよう」

「はい」

「それじゃあ、また明日来るからね」

男性はそう言葉を残すと病室から出て行った。それと入れ替わりでまた担当医が入ってきた。

この日は一日中検査と担当医からされる質問に答えた。

検査の結果、身体に異常はないが事故の影響から名前以外の記憶が

なくなっているという結果がでた。

当然のことながら、事故より前に何があったかなどわかるわけもない。

そしてそのまま入院生活は過ぎていった。俺が目覚めた日に来た男性は毎日ではないが結構な頻度で顔を出し、ずっと俺と会話をする。

男性との会話でわかったことは、

まず俺の年齢が5歳であること、

この入院のきっかけとなった事故で俺の両親が亡くなったこと、

ここが麻帆良という地名だということ、

男性の名前が明石というらしいこと、

この明石さんは夫婦そろって両親と友人だったということ、

明石さんにはゆーなという娘がいるということだった。

そう、この時点で気づいたことであるが麻帆良、明石、ゆーな、少なくとも俺はこのワードが関連するものに覚えがあった。

「ネギまの世界か～」

本格的にそうだと言える証拠は現段階では無いが、恐らくそうなんだろうなというのは、勘が告げていた。

ケガが治り退院した後、明石さんを連れて家に帰る。

とは言っても自分は家の場所を知らないのだから、正確に言うと明石さんに家に連れて行って貰っている。

遺産などの管理や手続きは明石さんがやってくれたらしい。

本当に明石さんには感謝するしかない。

家に到着すると、明石さんが何か思い出せたことはないか聞いてきたが、元々ここでの記憶はないので否定しておいた。

家の中を隈無く捜索する。

すると恐らく書斎なのだろう本棚が壁一面にある部屋を発見した。

部屋の中に入り本棚に近づくと明石さんも部屋に入ってきた。

それを無視したうっすらと埃が積もっている本棚から少し厚みのある本を抜き取る。その本にはこう書かれていた。

“西洋魔法の性質と運用方法”

「魔法か」

手に取った本と俺の言葉を聞いたであろう明石さんが口を開いた。

「君のお父さんとお母さんはね魔法使いだったんだよ」

“魔法使い”

ネギまにおいて、原作を構成するための要素であり、役割である。

未来人にして火星人の超鈴音曰わく魔法世界には六千七百万人いるらしい、つまり世界人口の百人に一人が魔法使いということになる。旧世界と呼ばれるこちら側に魔法使いが全員いるというわけではないだろうからこの計算が正しいのかわからないが。

それに魔法使いと言ってもあくまで全員が魔法を使えるわけではなく関係者だけということも考えられる。

しかし、ネギまの原作において魔法に関わるということは、基本的に戦闘行為に関わることを意味する。

魔法学校において一桁の年齢の子どもに攻撃魔法を教えるのだ。

基礎教育に攻撃手段が入っているあたり、魔法使いという存在はどれほどの危ないのかがわかる。

攻撃手段を保有するということは、魔法使いが戦力として数えられることを意味するし、

逆に攻撃手段を持たないといけないということも意味している。

「明石さん」

「なんだい？」

「俺も魔法使いになれますか？」

しかし魔法使いなのだ。

もし自分が魔法を使える可能性があるなら、殆どの人間が魔法を使えるなりたいと思うだろう。

それにこの世界がネギまの世界であったなら、やはり戦闘能力は欲しい。

たとえネギまの世界じゃなかったとしても、魔法を扱えることで選択肢が増えるならそれもアリだと思う。

確かに危険は増すが、もし魔法を覚えずに抵抗ができなくて死んで後悔するぐらいなら、魔法を覚えて抵抗して死ぬほうがマシだ。

「うん、なれるよ。僕もできる限り力になろう」

こうして俺の異世界ライフは始まった

第1話　家族は大事です（前書き）

文字数が少なく感じる、できれば４０００から５０００文字くらいはほしい

第1話　家族は大事です

幸いなことに明石さんはすぐに許可を出してくれた。元々俺が言い出せば聞き入れようと考えていたらしい。

明石さんに魔法使いになりたいという宣言をしたあとに自分の部屋に行き荷造りをする。

流石に一人でこの家に住むというわけにはいかないだろう。

ということで明石さんの家で暮らすことになった。

「今日からうちで暮らすことになった司条涼くんだ」

「えと、よろしくお願いします」

これからお世話になるのでキチンと頭を下げて、目の前にいる女性と女の子に挨拶をする。

「よろしくね涼くん、私は夕子よ。気軽に夕子さんって呼んでね♪
ほらっ！ゆーなも挨拶しなさい」

「あかしゆーなでーすっ！よろしくね、すずみくんっ！」

やはり、親子だからだろう。二人とも雰囲気がよく似ている。

「じゃあ涼くんの退院おめでとうとようこそ明石家にのパーティーをするわよ！」

そう言って夕子さんがダイニングに案内してくれた。

すると、もうすでに食卓には色鮮やかな様々な料理が所狭しとと並んでいた。

「涼くんが退院って聞いて張り切って作ったのよ♪いっぱい食べてね♪」

夕子さんが笑顔で言ってくれた。この人は自分が一人増えることの負担なんてなんとも思ってないようだ。

普通だったら、いくら友人の子どもであってもここまでしてくれるはずはない。

それなのに、明石さんも夕子さんも笑顔で自分を迎えてくれた。

裕奈ちゃんはまだ幼いので、ずっとニコニコしているんだけど、

「ありがとうございます」

「涼くん！」

ここまでして貰ったのだから素直にお礼をいうと、夕子さんは少し叱るように言ってくる。

「涼くんは今日から一緒に家で暮らすんだから、そんな堅苦しくしないでいいのよ。だって家族なんだから」

こう言ってくれた以上は遠慮なくとまではいかなくても、少し崩させてもらおう。

「うんっ！、ありがとう夕子さん」

……まあ、口調は作るんだけどね

すると、今まで黙っていた裕奈ちゃんがガマンできなかったのだろうか割って入ってきた

「おかーさんばかりズルい！！わたしもすずみくんとおしゃべりしたい！！」

「ハイハイ裕奈、それよりせっかくのご飯が冷めるから座ろうか」

明石さんが裕奈ちゃんを宥めると全員で椅子に座る。

席は俺の隣に裕奈ちゃん、向かい側には明石さん、その隣に夕子さんが座るという形だ。

ちなみに裕奈ちゃんは俺の隣は譲らなかった。

たぶん、話しをするのに近いほうがよかったのだろう。

「じゃあ、涼くんの退院と新しい家族が増えたことにかんぱーいっ！！！」

「かんぱーいっ！！！」

乾杯が終わり、目の前にある唐揚げやサラダに手をつける。

唐揚げは皮がパリッとしていて、中のお肉にもしっかり下味がついており、サラダもちゃんと湯通ししてあるのだろう、レタスがシャキシャキで両方ともとても美味しい。

「美味しい！」

「そう？そう言ってもらえると夕子さん頑張ったかいがあったわ～」

夕子さんは俺に料理を褒めて貰えて嬉しそうだ。やはり身内以外に褒められると嬉しいのだろう。

「ねえ～ねぇ、すずみくん？」

「なに裕奈ちゃん？」

「むぅ～」

裕奈ちゃんに呼びかけられたので隣を向いてみると、裕奈ちゃんは頬を膨らませ剥くれていた。

「ゆーな」

「裕奈ちゃん？」

「ゆーなってよんでっ！！」

どうやらちゃん付けでよんでいたのがお気に召さなかったようだ。

「うん、わかったよ裕奈」

「うんっ！」

このやりとりを明石さんは微笑ましくみているが、夕子さんはニヤニヤとみていた。

……絶対楽しんでいるんだろうなぁ

食事は終始このように楽しく過ぎていった。

食事が終わると部屋に案内された。

「ここが君の部屋だよ」

部屋は割とシンプルでベッドとクローゼット、あとは勉強机と　大きめの本棚があった。

床には、自分の家で纏めたダンボールが置いてあった。すでに運んでくれてあったらしい。

ダンボールの中には服よりも魔法関係の本が多く入っているが、

「荷物の片付けは明日一緒にやるとして、今日はもう疲れただろうからお風呂に入ろうか」

明石さんがそう言ってくれたので、着替えをバッグから取り出して、お風呂場の方へ移動した。

脱衣場で服を脱ぎ明石さんの方をふと見てみる。

明石さんの身体はインドア系の人間にもかかわらず、割と引き締まっていた。

メタボな中年男性が増えているなか三十代にしては見事な身体つきだろう。

それとも、魔法先生としての仕事が忙しくて痩せているのか……

魔法関係者ということで傷痕みたいなものがあるのかと思ったがそうでもなかった。

お風呂に入ったあとは部屋に戻り、すぐに寝ようかと思ったが　荷物を少し片付けることにした。

明日手伝ってくれるみたいだが、やはり自分のことは自分でやっておきたい。

衣服をクローゼットの中にしまう。といっても、服自体何十着もあるわけではなく上下十着程度だし、子供服なのでそこまでスペースをとらなかった。

そして、ダンボールに詰められた本を本棚に移していく。

本は自分の家の書斎にあったものの一部で、魔法入門書や初心者用の魔導書や西洋魔法の種類別の魔法辞典シリーズ本など、厚いもの

や薄いもの、大きい図鑑サイズのものや文庫本サイズのものなど様々だ。

明石さん曰わく、既に絶版になっていて希少価値の高い本もあるらしい。

子どもの身体では大きい本や本棚の上の棚には置けないので、軽い本を下から入れていく。

ある程度、自分に入れる本は入れた時だった。

手にとった本は表紙に何も書かれておらず、本全体が真っ白で買ったばかりの新品のようにキレイだった。

本の中身が気になったので開いてみると、中には写真が挟まれていた。

どうやら、自分と両親の写真のようだ。

写真の中の両親は、自分の知る両親と同じ顔をしている。

その瞬間、胸が苦しくなり悲しみが込み上げてくる。

向こうにいた時は、親は元気だった。

でも、こちらではもう親に会うことはできないのだ。

そう考えると、目から一粒の涙が零れ落ちた。

……ごめんなさい、あなた達の子どもはあなた達に何もしてあげる

ことができませんでした。

写真を机の上に置き、改めて本の中身を見ると、これは本ではなく文庫本サイズのメモ帳であった。

中には様々な魔法の術式とそれがどのようなモノなのかを書いてあった。

高位の治療魔法や最上位クラスの攻撃魔法などが書かれているのを見ると両親のどちらかが使用していたのだろう。

キレイ過ぎるのが気になったがどうやら魔法をかけているようだ。

まさか、ナギ・スプリングフィールドと同じことをしているとは。

本は左上のほうに穴が開いてあり、どうやらここにチェーンなどを通して落ちないようにしていたようだ。

……これは、自分で持ち歩けるようにしておこう。

そう思い、本を机の上に置く。

「はあ、もう疲れたから寝よう」

こうして、明石家での初日は過ぎていった。

第1話　家族は大事です（後書き）

誤字脱字の報告や感想をお待ちしています

第2話　できることをやりたいです

明石家に暮らし始めてから二週間が過ぎた。

まだ五才ということもあり、昼間は麻帆良のなかにある幼稚園に通っている。

幼稚園が終わると明石さんと夕子さんから魔法を教えてもらう。

「じゃあもう一回“火よ灯れ”をやってごらん」

「はい！プラクテ・ビギナル　“火よ灯れ”」

初心者用の杖を円を描くように振る。すれと杖の先から火が出た。

明石家に住み始めてから、魔法の練習をしてみてどうやら普通の魔法使いレベルよりはすこし才能はあるらしい。

明石さん曰わく

「涼くんの魔法を習得するのがは他の魔法使いより早い」

とのことだ。“火よ灯れ”も普通であれば何百回も練習しないとできないらしいが、俺は三十四回目で完全に成功した。

といっても、習得するのが他人より少し早いだけで保有している魔力量については教えてくれなかった。

「すずみくんスゴーイ！おとーさんおとーさん、わたしにもやらせ

て！！」

それとここには裕奈がいる。明石さんに俺が魔法を学び始めた頃から裕奈も魔法を学んでいる。

とはいっても裕奈なこれを遊びか何かだと思っているらしく、魔法もおもちゃと同じぐらいの扱いだ。

「よ～しっ、ぷらくて・びきなる　“あ～るですかっと”」

裕奈が勢いよく杖を振ると、ボッと音をあげて火が灯った。

「やった～～！！できた～～！！できたよおとーさん！、すずみくん！！」

「おおっ！スゴいぞゆーな！！」

「うんっ！裕奈スゴい」

裕奈はこの日が魔法を覚えて三日だった。しかも魔法の練習は一日一時間しか行っていないのだ。

「まさか“火よ灯れ”がこんなに早くできるようになるなんて……」

明石さんも驚くほど早かったらしい。

裕奈には魔法使いとしての才能がある。それは良い事なのか悪いことなのかはわからない。

でも、俺にとって裕奈は大切な家族だから守ろうと思う。

魔法の練習が終わって家に到着すると夕子さんが夕食を作っていた。

「あっ、おかえりーっ！三人ともお疲れ様ね、もうすぐでご飯ができるから、手をあらってきなさい」

手を洗い、椅子に座る。するとテーブルの上に料理が並ぶ。

「じゃあ、頂きます」

「「「いただきます」」」

手を合わせて食事にはいる。これがいつもの光景だ。

最近食事をしていると裕奈があ～んをしてくる。

仕方ないのでそれに付き合いお箸に挟んであるプチトマトを食べた、そしてお返しにハンバーグをあ～んをしてやる。

それを正面にいる大人二人はニヤニヤしながら見ている。

「そういえば、今日はどうだったの？」

どうだったというのは魔法のことだろう。

「ああ、順調だよ。それと今日ゆーなが始めて“火よ灯れ”を成功させた」

明石さんがそう言うと夕子さんは驚く。夕子さんは裕奈の方に向くと

「ゆーな、今日杖から火を出せたの！スゴいわね！！」

「うんっ！、つえがぴかーってひかってひがでたよ～」

夕子さんも裕奈もうれしそうにしている。

すると夕子さんは裕奈のほうをジッと見て

「ねえ、ゆーな?涼くんのこと好き?」

「げほっ、ごほっ」

「あらあなた、汚いわよ」

夕子さんはいきなり裕奈に向かって屈託もない笑顔で聞いていた。

明石さんは飲んでいたお茶を吹き出した。

「すずみくん？　だいすきだよ～！！」

「そう、なら涼くんは?」裕奈は無邪気な笑顔で答えた。子どもに言われたことなのに妙に気恥ずかしい。

「俺も裕奈のこと大好きです」

俺も嘘偽りなく答える。当然だ、嘘を吐く理由もないしこの元気で明るい裕奈のことは大好きなのだ。

「ふんふん、なるほどなるほど」

夕子さんは俺たちの答えに満足したのか、なにやら納得した表情を浮かべていた。

「いやいや夕子さんっ、二人にはまだ早いんじゃないかな!?」

明石さんがなにやら焦ったように夕子さんに詰め寄る。

「いや～、せっかくだしどうせなら涼くんがいいかな～って」

「それでも、パクティオーはまだ早いよっ！」

“仮契約（パクティオー）”

なるほどどうやらこの事で夕子さんはさっきの質問を俺たちにしたんだろう。そうであれば納得だった。

どうやら夕子さんは裕奈と俺に“パクティオー”をさせたいらしい。

それを明石さんが止めているようだ。

「う～ん、やっぱりダメか～」

いつの間にか明石さん達の話しは終わっていた。

どうやら今回は夕子さんが折れたようだ。少し残念そうにしている。

「ねえ、パクティオーってなに??」

裕奈は気になっていたのだろうパクティオーについて夕子さんに聞く。

「好きな人と将来結婚できるおまじないよ」夕子さんは裕奈にパクティオーについて教える。その顔は何か企んでいる顔だった。

「じゃあ、パクティオーしたらすずみくんとけっこんすることができるのー？」

「ええ、そうよ。ゆーなは涼くんと結婚する？」

「うんっ！、わたしすずみくんとけっこんする～！！」

夕子さんは裕奈の言葉に笑みを深めていた。

裕奈の言葉は所詮子どものころの他愛ない気持ちに過ぎない。

大人になるにつれて、いろいろな人を好きになり、子どものころの約束なんて忘れてしまう。

「俺も裕奈と結婚したいな」

当然、俺も裕奈の言葉に乗って言ってみる。

俺の言葉に夕子さんはますます笑顔になっていく。

こうして食事は進んでいった。

結局、パクティオーはしなかった。

明石さんが止めたというのと、パクティオーをする事でゆーなが魔法使いへの道に捕らわれたりしないようにするためだ。

魔法使いになるとまず魔法ありきで考えてしまう。それを防ぎたかったのだろう。

個人的には少し残念なことであるが仕方ない。

俺は部屋のベッドに寝転がると原作について思い出す。その内容は夕子さんの死亡時期だ。

夕子さんが死ぬのが裕奈が五歳のときだから、あと一年以内、早ければ数ヶ月、いや数週間かもしれない。

どうやって助ける？　どうやって助ければいい！？

見捨てるなんて選択肢はない。両親をなくした俺にとって明石家のみんなは大切な家族なのだ。

魔法世界に行くんなら、それを止めることはできないか？

……無理だ、そんな子どものワガママで仕事を止めるわけにはいかないだろう

誰かに頼む

……これこそ無理だ、そもそも頼れる知り合いのいない

なら、夕子さんに気をつけるように注意を促すか

……しかし夕子さんもプロだ。子どもに言われるまでもなく、警戒しているはずだ。その結果が死亡なのだ。

なら、最後の手段、

“自分が異世界の存在だとバラす”

……これしかない、

たとえこれを話すことでみんなと離れることになってもよかった。

この手段をとることで、もしかしたら実験台にさせられるかもしれないし、記憶を消されて自分という個我がなくなってもよかった。

いや、本当は怖い。

でも、両親をなくした今、自分を大切にしてくれた家族のためにできることをやりたかった。

ベッドから起き上がり、時計を見るとまだ十一時だった。

この時間なら裕奈は寝ているので都合がよい。

部屋からでると明石さんの部屋へ向かう、おそらく部屋で仕事をしているはずだ。

部屋の前に着くと呼吸を整える。やっぱり秘密を話すことへの恐れはある。

恐い、怖い、コワい。

せっかく仲良くなった人達に拒絶されるのが恐い。せっかく好きになった人達に嫌われるのが怖い。

……でも、このまま過ごしていたら夕子さんが死んでしまうかもしれない。

もう一度、ゆっくりと深呼吸をする。

ここで後悔はしたくないと覚悟を決めて、扉をノックした。

「入っていいよ～」

「失礼します」

部屋の中に入ると、そこにはたくさんの本が積み重なっている。その部屋のちょうど真ん中の机で明石さんは書類仕事をしているようだった。

「涼くん？どうしたんだい、こんなよる遅くに？もう遅いから寝ないといけないよ」

明石さんは俺がこんな時間にやってきたことに疑問を持つものの、子どもなので早く寝るように俺に促した。

「あの、大事なお話しがあります。夕子さんも一緒に話したいのですがよろしいですか？」

明石さんは俺の口調と真剣な雰囲気を感じ取ったのか、すぐに真剣な表情になった。

「わかった、すぐに呼ぶから待っててくれるかな」

明石さんはそう言うと軽く目を閉じた。どうやら念話で夕子さんを呼んでいるようだ。

数分すると夕子さんが部屋の中に入ってきた。その手にはお盆がありマグカップが三つ乗っている。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

「それで大事な話しって？」

夕子さんから差し出されたマグカップを受け取り、中に注がれているホットミルクに口をつける。

「はい、俺のことについてです」

こうして長い夜が始まった。

第2話　できることをやりたいです（後書き）

感想をお待ちしています

第3話　カミングアウトって恥ずかしいよね？

現在、部屋の中は静まり返っている。その静さが今の俺には辛い。

「秘密……ね、わかった。君にどんな秘密があるのかを教えて貰おうか」

明石さんが真っ直ぐに俺の目を見てくる。俺は真っ直ぐとその目を見ながら、全てを語りは始めた。

「まず、始めに俺はこの世界での記憶がありません」

「君に記憶がないのは知っているが、この世界での……とは？」

「まさか、自分には他の世界での記憶があるというような言い方ね」

二人は訝しげな目で俺を見ている。

「ええ、その通りです。俺には別の世界での自分の記憶があります」

「嘘……は言っていないようね」

「……信じて貰えるんですか、わりと荒唐無稽なこと言ってるつもりなんですけど？」

俺は二人が意外とあっさりと自分の言葉を受け入れたことに驚く。

「簡単なことだよ、魔法の中にはその言葉がホントかどうか見抜く魔法もある」

「それに涼くんが、わざわざ私達を集めてまで嘘をつく理由もないわ」

なるほど、すっかり忘れていたが、ネギがタカミチに対して使っていた、人の思考を読む魔法か……なら話しは早い

「ではお話しします。僕の記憶のある世界では、一冊の漫画が売られていました。
その漫画のタイトルが“魔法先生ネギま！”です」

「魔法先生？」

「ネギま？」

二人は何故いきなり漫画について話し出したのか疑問のようだが、俺の真剣な表情で話しているのを見て、大人しく話しを聞いてくれている。

「はい、その漫画の主人公は大戦の英雄であるナギ・スプリングフィールドの息子です」

「……ちなみにその子の名前は？」

「ネギ・スプリングフィールドです。一九九四年生まれで裕奈より五つから六つ下になります」

「なら、そろそろ生まれてくるのかな？」

「はい、」

明石さんは気になるのだろう。会話途中に質問を挟んでくる。

「続けます。物語は二〇〇三年二月、ネギ・スプリングフィールドが魔法学校を卒業した時から始まります」そして、俺はネギまのシナリオを話し出した。

ネギ・スプリングフィールドが修行としてこの地、麻帆良で教師をやることになったこと。

そのクラスには、中学二年生となった裕奈や関西呪術協会の長である近衛詠春の娘などがいること。

麻帆良に到着したその日に魔法をバラしてしまうこと。

正式な教員となるために担当したクラスを期末テストで最下位から脱出させること。

闇の福音エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルと戦うこと

修学旅行で京都に行き、親書を西の長に渡すこと。

その際、妨害にあい、サウザンド・マスターが過去に封印したリョウメンスクナノカミと戦うことになり、最終的にエヴァンジェリンに助けられること。

そして、ネギ自身が石化し、それを西の長の娘である近衛木乃香とパクティオーすること。

学園祭のときに開かれる武道祭でアルビレオ・イマのアーティファクトによって父親と戦うこと。

学園祭最終日、ネギの子孫である未来人によって全世界に魔法がバレるのを防いだこと。

魔法世界に行き、そこで拳闘大会に出場し、千の刃ジャック・ラカンと戦うこと

……そして、魔法世界の真実と決戦。

俺は自分が覚えている限りを全て話した。そして夢見の魔法を使い記憶にある三十六巻までの全てを二人に見せる。

そのなかには夕子さんが死んでいるというシーンも当然ある。

「ふう、なるほど……」

「なるほどね……」

長い時間、話していたので三人とも一息ついた。

すでに話し始めてから、一時間が経っていた。マグカップに注いであるホットミルクもすでに冷めている。

二人も夢見の魔法の中で見たネギまの原作に戸惑いを隠せないようだ。

「涼くん、君に聞きたいことがいくつかある…」

「……はい」

「なぜ、君はこれを私達に話したんだい？正直隠しておいてもよかったはずだ」

「そうね、これを話すことであなたは私達に本物かどうか疑われる可能性もあったし、私達に信じて貰えない可能性もあった、もしかしたらあなたを異端として排除したかもしれない」

「……それでも、夕子さんには死んで欲しくなかったんです」

俺は自分の想いを二人に告げる。

「元いた世界の家族にはもう会えません。この世界にいた両親はもう死んでいます」

ぽつりぽつりと口から言葉が紡がれていく。それはもはや懺悔に近かった。

「だから、もう家族を失いたくなかったんです、ただこの程度のことで家族を助けられるなら、何もしないで後悔はしたくないから」

本音を語るのが辛い……、嘘を言っているわけでもなく、言葉にやましいことを言っているわけでもないのに、ただ辛かった。

二人が示唆している可能性は当然考えついた。だからこそ言葉にされると余計に怖くなる。

「それに家族ですから、二人のことを信じてますから」

そう言った瞬間に夕子さんに抱きしめられた。

「ありがとう、そう言ってくれて嬉しいわ」

「うん安心してくれ、僕たちは涼くんを嫌ったりしないよ」

「でも、今まで隠してきたし、年齢も実際はもっと上なんですよ！？」

そう、俺は二人に黙っていたのだ。年齢のことも記憶のことも、もっと早く言うことができたのだ。

「そんなの関係ないよ」

「そうね、そんなの関係ないわよ」

――だって、家族なんだから

二人の優しさがとても嬉しい。だから……

「ありがとうございます」

ここで感動のままで進めばよかった。

しかし、物語はこのままでは終わらない。

「実はね涼くん、君から見せて貰った記憶は現実では少し違っているんだ」

既に原作と違っている可能性、それについては考えていた。

「まず、大きく違っている所だけどね“紅き翼”にはあと二人メンバーがいた」

「二人“いた”ですか？」

「うん、二人いたんだ」

明石さんから知識との差異について明石さんがわかる範囲で教えてくれた。

まず第一に“紅き翼”には俺の知らないメンバーが二人いた。

一人はナギと同い年で、ナギと同じように膨大な魔力をもった魔法使いだったらしいが“墓守りの宮殿”での闘いで死んでしまったらしい。

そしてもう一人はタカミチと同い年で、タカミチやクルトとは違い魔法を使って戦う、魔法使いらしい魔法使いであるらしい。

そしてどうやらその人物はここ麻帆良にいるとのこと。

「会ってみたいかい？」

「はい、もしかしたら俺と同じイレギュラー（知識持ち）かもしれませんから」

「なら、早く会えるように彼に頼んでみるよ」

「よろしくお願いします」

自分と同じイレギュラーな存在。気にならないといったら嘘になる。

「じゃあ今日はもう遅いから寝ましょう、涼くんも私のために話してくれてありがとね」

「うん、そうだね、それと涼くん？」

「なんでしょうか？」

「君はいったい幾つなんだい？」

「記憶にある限りでは二十歳です。一応、大学に通ってました」

明石さんはさっきまでの話しで出てこなかった、俺のことがしりたかったようなので素直に答えておく。

「なるほど、今日は話してくれてありがとう、おやすみなさい」

「はい、二人ともおやすみなさい」

「ええ、おやすみなさい」

明石さんの部屋を出て自分の部屋に戻るとボフッとベッドにダイブする。

二人が信じてくれてよかった……

いや、夢見の魔法や思考を読める魔法があるから信じてくれる可能性は高かったのだろう。

それでも、もし受け入れてくれなかったら、と思うとゾッとする。

ただ、伝えられたという安心感や話しをしていた時の精神的な疲労、そして夜遅いという眠気から、すぐに眠りにつくことができた。

◇

「どう思う？」

「さっきの話しのこと？」

涼くんが出て行ったあと先ほどまでの話しについてゆーこさんに意見をきいた。

正直、いきなり過ぎて頭がこんがらがっている。

「あの知識なら、信憑性は高いんじゃないかしら、私にメガロへの出張依頼が来ているの知っているでしょ？」

そう、ゆーこさんには二ヵ月後にメガロへの出張依頼が来ていた。

「もちろん知っているよ、それでどうするつもりだい？」

そう、依頼を請ければ自分が死ぬ可能性がある、しかし依頼を断れば自分以外の誰かが死ぬかもしれないのだ。

「そうね、でも期限はまだ先だし、まずは涼くんと彼を会わせてから考えるわ」

「よかった、君が行くって言ったら僕は命がけで止めたかもしれない」

「まだ、時間もあるからね、それに私もゆーなたちを残して死ねないわ」

そう言ってくれたことに安心する。いくら危険なことがわかってこの仕事をやっているとはいえ、今回のように死ぬのがほぼ確定的のように示されていると行かせたくはなくなる。

「それにしても、彼の記憶には驚いたなあ」

「そうね、もしかしたらああいう未来が待ってたかもしれないと思うと……」

たしか、魔法先生ネギま……だったか、涼くんの記憶にあった漫画のストーリーには驚かされた。

「しかし、違う所もある」

そう、涼くんの記憶とはすでに違う所もあった。

でも、なんにせよ……

「全ては彼を涼くんに会わせてからだな」

「そうね、それがおわってからこれからのことを決めていきましょう」

学園長にも報告はすべきなのだろうが、今はまだ判断に困る。

「そう言えば、涼くんって二十歳なのよね？」

「うん、本人がそう言っていたしね」

「私、この前涼くんとゆーなと一緒にお風呂入ったのよね～」

ただ、明日から涼くんへの訓練は厳しくしようと思った。

第3話　カミングアウトって恥ずかしいよね？（後書き）

感想をお待ちしています。

ちなみにこの作品は毎週水曜日と日曜日に更新の予定です。

話しのストックがあるとはいえ心配ですが…

では皆さんこれからもよろしくお願いします。

第４話　思い込みと勘違いは危険なものです（前書き）

思ったより筆が進んだので、投稿します。

今回は新たなオリキャラが登場します。

ではどうぞ

第4話　思い込みと勘違いは危険なものです

明石さんたちに全てを話した次の日、なぜかいつもより厳しい訓練を終えて、家に戻るとそこには人が立っていた。

その人は、中性的な顔立ちで、長く真っ直ぐで綺麗な髪をしている。

一見すると女性のようにも見えるが、男性もののジャケットとジーンズを着ているため、性別がどちらなのかわからない。

「紹介するよ、彼は霧島（きりしま）　浅葱（あさぎ）くんだ」

「ヨロシクね♪すずみくん♪君のことは明石教授から何度か聞かされているよ♪」

その声は透き通るようなソプラノボイスで、跳ねるように言葉が聞こえてくる。

その容姿と相まってか、始めに彼が男性と聞かされていなければ、間違いなく女性と間違えただろう。

「はじめましてあさぎさん、俺のことは涼と呼んで下さい」

その瞬間、彼の表情が一瞬だけ変化したのを俺は見逃さなかった。

「なるほど♪なるほど♪君もそうなんだ♪」

「ということは、浅葱くん、君も知識を持っているのかい？」

明石さんの言葉に彼は笑顔で答える。明石さんがなぜ知っているのか疑問に思っていないようだ。

「うん♪そうだよ♪ボクはその子と同じ知識持ち、でもなるほど、君はそれを選ぶんだね♪」

「知識をバラして介入することをいってるのか？」

「そう♪」

彼は何が楽しいのか、俺の方を向きながらずっと笑顔でいる。

「それにしても驚かないんだな、明石さんに知識についてバラしたことに」

「だって、二人しかいないならともかく♪、他の人がいる前でイレギュラーなんて言ったら、その人も知ってるって教えているようなものだよ♪」

なるほど、状況から推測されたわけか……どうやら、彼の方が一枚上手らしい。

しかし、考えてみれば当然だ。彼は大戦を経験し、自分より長く生きている。ただの学生であった自分より、上であるのは当たり前だろう。

「それで♪バラしたのは何人かな？」

「明石さんと夕子さんの二人だけだ」

「う～ん♪、よしっ！じゃあ、今夜二人を連れて、図書館島の深部にきてね♪そこで君の知りたいことを話してあげるよ♪」

「わかった。じゃあ今日の夜に」

「それとボクのことはあさぎでいいよ♪」

そういうとあさぎの足下から魔法陣が現れ、それとともに消えていった。

目の前からあさぎが消えると、息を一つ吐いた。

……霧島浅葱

彼は知識持ちという点では、俺と同じであるがそれ以外の部分では、遥かに上にいる。

魔法使いという面ではいうまでもなく彼が上だし、こちらが欲しがっている情報を持っているという面でもあちらが有利だ。

もし、こちらに情報を与える対価として、何かを要求することができる。

そして、明石さんに知識をバラしたというのに反応が薄かったということを考えると、既にあちらも誰かに知識をバラしたか、もしかしたらバラしても問題ないような状況なのか。

「明石さん、あの人はいつもあんな感じなんですか？」

「ああ、普段はあんな感じだね、でも戦闘になったり本気になったりすると雰囲気が変わるって聞いたことがある」

「そうですか……」

あの態度が天然なのかそれとも作っているのかはわからない。

ただ、少なくとも俺には情報が必要だ。そのためには図書館島深部に行かなければならない。

そう、場所が図書館島深部ということも問題だ。

あそこには“紅き翼”の英雄、アルビレオ・イマがいる。

わざわざそんな所で話し合うということはアルビレオ・イマも関わってくるのだろう。

……なかなかメンドくさいことになりそうだなぁ

「涼くん、今悩んでいても仕方がないよ、まずは腹ごしらえをしよう」

明石さんは俺の表情の変化を感じ取ったのだろう。自分も行かなくてはならないから不安もあるだろうに、それを感じさせず、あまつさえ俺を心配してくれている。

……かなわないなぁ、ホントに

これが一家の大黒柱ということなのだろう。その偉大さは俺の悩みを軽くした。

俺も家族を持てればこう成れるのかなぁ？、

などとわからない先のことを考えるほど余裕ができた自分に安心する。

「そうですね、指定された時間は今夜ですし、時間まではゆっくりしましょう」

「ははっ、それだけ余裕があるなら安心だね」

二人で笑いながら、家に入っていった。

そして深夜、裕奈が寝付いたあと、さらに睡眠を深くする魔法を裕奈に掛けて、決して朝まで起きないようにする。

夜中に目覚めて自分たちが家にいないことがバレないようにするためだ。

「これでよし……と、それじゃあ行きましょう」

夕子さんが家に鍵を閉めると、図書館島に向かう。もちろん箒に乗って移動だ。

しかしながら、俺はまだ箒で飛べないため明石さんの後ろに乗っている。

「夜景が綺麗だ、それに気持ちいい」

「箒に乗って景色を見るなんて、魔法使いじゃないとできないからね」

空から見下ろす麻帆良も綺麗だったが、建物に邪魔されず見上げる夜空もまた綺麗だった。

空に近いためかいつもより星がはっきりと見える気がした。

そして頬を掠める風が心地良い。ただこれだけでも魔法を使える価値があるように思える。

そうこうしているうちに図書館島に到着する。すると、そこには霧島浅葱がいた。その顔は昼に会ったときよりも機嫌が良いように見える。

「お昼ぶりだね♪涼クン♪明石教授♪そしてお久しぶりですね夕子さん♪」

相変わらず跳ねるような言葉で挨拶をしてくる。

「わざわざ出迎えてくれてありがとう。あさぎ、ここからは案内してくれるんだろう?」

俺たちはその場所があるということは知っているが、どこにあるのかまでは知らない。当然コイツは俺たちを案内するために来たはず

だ。

「うん♪じゃあ涼クンはボクの後ろに乗ってね♪、お二人はボクの後ろをついて来て下さいね♪」

「うん、わかったよ」

「ええ、わかったわ」

俺は無言で明石さんの箒が降りるとあさぎの箒に跨がる。この時、あさぎに触らないのがポイントだ。

明石さんと夕子さんはこっちをみて苦笑いしつつもあさぎの言葉に従う。

「それじゃあ、れっつご～♪」

あさぎのゆるい言葉で図書館島の内部を進み始めた。

そして、少し開けた場所に出る。確かここはドラゴンがいる場所だった。

すると、正面にある扉のまえにドラゴンが降り立つ。

「アハハ、まさかホントに学園の地下にドラゴンがいるなんてね」

「さすがにこれは驚いたわ」

二人は目の前に現れたドラゴンに驚愕しているようだ。

いくら、俺の知識で知っているといっても、媒体が漫画だったのでイマイチ信憑性に乏しかったのだろう。

「この人たちはお客様だよ♪通してあげて♪」

あさぎがドラゴンに話しかけると、ドラゴンは飛び上がりどこかへ行ってしまう。

「じゃあ行こうか♪この先にみんなの疑問に答えくれる人がいるよ♪」

そして、扉が開かれる。そこに入ると上から地下に関わらず月の光のようなものが降り注ぎ、周りには、かなりの水が落ちる巨大な滝がある。

原作でここの存在を知っていても、ここの場所も周りの景色も別格だ。

初めて明石さんに魔法を見せてもらった時に匹敵する。

「凄いと言うべきなのか、マジかよと驚くべきなのか」

「素直に驚いていいと思うよ♪ボクもそうだったし♪」

そしてまた、通路を進み始める。中央にある建物の中に入り、少し進んだ先にあった扉を開けるとそこには一人のローブを着た人間が立っていた。

「ようこそ皆さん、お待ちしていましたよ」

「アルビレオ・イマ？」

いや、今更ではあるが原作通りであるならこの人物はアルビレオ・イマである。

「いえ、私のことはクウネル・サンダースと呼んでください」

「ああわかったよ、クウネルさん」

「え、ええ、わかりましたクウネル様」

「私もクウネルさんと呼ばせてもらいます」

わざわざ訂正してまでクウネルと呼ばせたいらしい。原作ではいつ名乗り始めたのかがわからなかったが、もうすでに名乗っているとは……

「ではこちらへどうぞ」

クウネルさんに案内されて、サンルームに入り、その中にあるテーブルに全員がついている。

テーブルの上には、紅茶と様々なお菓子が並べられていた。

あさぎはケーキやシュークリームを笑顔で食べている。

明石さんと夕子さんはこの状況に困惑気味だった。

無理もない。昨日いきなり俺に記憶のことを明かされ、次の日にはドラゴンに出会い、大戦の英雄に出会っているのだ。

正直、俺もこの展開の早さにはついていけていない。

「では始めましょう。司条涼くん、あなたの持っている知識とこの世界との違い」

クウネルが話し始める。その真剣な口調のためか少しずつ緊張感が増していく。

「そして、私たちが知る限りの全てをあなたたちに話しましょう」

今日もまた長い夜が始まる。この時はこれがまさか俺の人生に深い影響を与えることになるとは夢にも思わなかった。

第４話　思い込みと勘違いは危険なものです（後書き）

１日で２０００アクセスを超えていたので驚きました。

皆さん見て下さって本当にありがとうございます。

これからも頑張りますので、皆様よろしくお願いします。

第5話　相違点（前書き）

予定どおり更新日に投稿です。

この話しで完全に原作ブレイクします。

ではどうぞ

第5話　相違点

クウネルさんは手元にある紅茶に口をつける。そしてゆっくりと話し出した。

「まず涼くん、君の持っている知識を拝見しますね」

クウネルさんはその場を動かず目を閉じて呪文を唱える。

時間にして、数分ぐらいは経っただろうか。クウネルさんは目を開けて、こちらをじっと見てくる。

「ふむ、君の人生はなかなか面白いですね」

「ってオイっ！！！！」

そういえばこいつは他人の人生収集が趣味だったな。

「ああ、ついでに見せてもらっただけですよ。他意はありません」

「あ、あのクウネル様、話しを進めていただけますか」

「ああ、そうでしたね。涼くんの知識と現実との違いは二つあります」

明石さんが催促したからか、クウネルさんは話しを進め始めた。

「一つはここにいる浅葱くんと同じように、紅き翼にはもう一人、

君と同じ知識持ちがいました」

「にはってことは、他にもいるってことよね？」

「ええ、もう一人は『完全なる世界（コズモエンテレケィア）』にいました。そのあたりは私より浅葱くんの方が詳しいでしょう」

そう言ってクウネルさんは、あさぎの方へ目をやる。あさぎはというと、これまでとは違いその表情は真剣だった。

「ということは、俺を含めて四人いたということになるのか？」

「ええ、少なくとも私にわかる範囲では君も入れて四人です。しかし、すでに知っていると思いますが、こちら側の一人と『完全なる世界（あちら）』側の一人はもうすでに死んでいます」

紅き翼と完全なる世界に一人ずつ。紅き翼はわかるが完全なる世界に属していた奴は何が目的だったのか。

「そして、もう一つの変更点は完全なる世界の目的です」

恐らく、この辺にそのもう一人の思惑が関わってくるのだろう。

『完全なる世界（コズモエンテレケィア）』

彼らの目的は魔法世界を書き換え封じることで魔法世界人を救うということだったはずだ。

わざわざこうやって言う以上、多少の違いはあるのだろうと思っていた。

「結果からいうと、彼らの本当の目的は魔法世界を現実に完全に一つの存在として構築することでした」

「つまり、魔法世界という『幻想（アンリアル）』を『現実（リアル）』にするのが彼らの目的だったんだ」

「それはつまり、魔法世界にいる十二億人の救済を意味します」

正直、完全なる世界の目的が変更されていたのはいい。

どうやってとか、聞きたいことはいくらでもある。

……しかし

「『完全なる世界』の目的が知識とは違っていたのはわかった。でも『紅き翼』は『完全なる世界』を倒したんだろ。それは何故だ？」

そう、結果として『完全なる世界』の目的が魔法世界の救済にあるなら、『紅き翼』と敵対するのはおかしい。

「それは……」

クウネルさんは言葉を濁し、苦い表情をしている。

「そこから先はボクが説明させてもらうよ」

クウネルさんが言葉に詰まっているのを見てか、あさぎが説明を代わる。

あさぎの表情は真剣で、口調も今までの跳ねるような口調ではなかった。

それがあさぎの本当の姿なのか。今日会ったばかりなのでわからない。

「まあ、実際に見てもらったほうが早いから、今から夢見の魔法をみんなに掛けさせてはもらうよ」

あさぎはそう言って、俺たちに魔法を掛ける。

夢見の魔法の始まりは『墓守り人の宮殿』

つまりは大戦の最終決戦の場面から始まった。

◇

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

『墓守り人の宮殿』が見渡せる高台に『紅き翼』の面々がいる。そこには幼き日のあさぎらしき子どももう一人、男性がいる。男性には特に特徴といえるものがなかったが、彼がクウネルさんが言っていたもう一人のイレギュラーなのだろう。

「ラカン、気をつけたらどうだ、油断して命を落としては元も子もない」

「はんっ！テメーは警戒しすぎなんだよ、もっと余裕を持ったらどうだ」

イレギュラーと思わしい男性はラカンの態度に注意を送るが、ラカンはむしろ余裕を持ってそれに返している。

「ナギ殿！　帝国・連合、アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

若き日のセラスがナギに報告をしにきた。

「おう、あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる、頼んだぜ」

「ハッ、それであの……ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか」

「おあ？ああ、いいぜそのくらい」

「そ、尊敬していました」

ナギはセラスにサインを求められ、それに素直に応じる。

決戦前なのに余裕あるな～、

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同

じだろう」

「決戦を遅らせることはできないのか？」

ここでイレギュラーの男性が口を開く、というかあまり喋らないんだな。

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています……、『世界を無に返す儀式』を」

さっきは完全なる世界の目的は変わっていたはずなのに、ここではまだ気づいていない……

『気づいていると思うけど、この時はまだボクたちは『完全なる世界』の目的に気づいていなかったんだ』

頭の中にあさぎの声が響きわたる。

「世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです」

「ああ」

そう言ってナギは手に持った杖を回す。

「浅葱大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

イレギュラー組は決戦へ向かうために魔力を高めている。

「よぉしっ野郎ども、行くぜっ！！」

こうして決戦が始まった。

紅き翼の面々が『墓守り人の宮殿』に攻め込む。それを『完全なる世界』の面々が出迎える。

「やあ『千の呪文の男』また会ったね。これで何度目だい？」

完全なる世界の面々は紅き翼の面々に負けず劣らず濃いメンバーだった。

……若干、どちらも似てないかこれ、

「僕達もこの半年間で君に随分数をへらされてしまったよ。……この辺りでケリにしよう」

たしか二番目だったか、こうして見ている分には、表情の変化はほとんどないように見える。それは無表情というわけではなく、少し楽しそうな表情だ。

人形とか言われてたから、もっと人間離れしていると思ったら、そうでもないんだな。

そうして完全なる世界と紅き翼の戦闘が始まる。

イレギュラー組は二人で完全なる世界のメンバー一人と相対してい

る。

「ふん、ここではちと狭い。場所を変えるか」

完全なる世界のメンバーが二人に対して転移魔法を使う。

「しまった!!」

「二人とも!!」

クウネルさんが二人に近寄るが既に遅かった。

二人が転移した先は墓守り人の宮殿の外であった。

「さて、少々相手をして貰おうかイレギュラー」

「イ、イレギュラーだとっ!!まさかお前も!?」

「ああ、貴様らと同じイレギュラーだ、原作知識持ちだよ」

完全なる世界のイレギュラーが魔法を放った。二人はそれを避けるが動揺をしているようであった。

「何故、お前は『完全なる世界』についている?!奴らは『世界を無に返そうとしているんだぞ!!」

「『世界を無に返す』だと?何か勘違いしていないか?」

「惚けるな!!貴様も原作を知っているなら何をしようとしているか、わかっているはずだ!!」

紅き翼側のもう一人が激昂したように叫ぶ。

「ふん、なら何故関わっているかもわかるだろう。簡単なことだ、完全なる世界の目的は原作とは変わっているのだよ……」

「目的が変わっている……だと？」

その瞬間、完全に動揺した二人に魔法が降り注ぐ。

「ぐわぁぁぁ！！」

「あぁぁぁぁ！！」

二人は降り注ぐ魔法に耐えきれず宮殿に叩きつけられる。

「ゴホッ、そ、それで、お前達の、目的はなん、なんだ？」

ダメージは酷いが、もうすでに変わった完全なる世界の目的が気になるのだろう、紅き翼のイレギュラーが質問する。

「まあ、貴様らには苦汁を嘗めさせられたが、冥土の土産に教えてやろう」

そして、ソイツは二人に告げる。

「我々の目的は魔法世界全ての救済だ！！」

「き、救済だと……？」

「ああ、そのためにこの魔法世界という幻想（ファンタジー）を現実（リアル）に変える！！それがこの儀式の正体であり、貴様らの知っている原作との違いだ！！」

紅き翼のイレギュラーは反論する。

「嘘だ！！俺達が調べた情報でもそんなことは書かれていなかった！！」

「当たり前だ、これは私と造物主（ライフメイカー）しか知らないことだからな、他の幹部達ですら知らされていない」

ソイツは続ける。

「つまりはだ。お前達が今まで行ってきたことも、これから行おうとすることも全て無駄なんだよ」

「……む……だ？」

「そうだ、お前達が今まで殺した人間もこの儀式が止めるための戦いも全てが無駄だ」

その瞬間、紅き翼のイレギュラーは絶望した表情を浮かべる。

「むしろ、儀式が止められることを考えれば、貴様たちは魔法世界にいる十二億人を犠牲にすることになる」

そして、ソイツは腕を振るうと紅き翼のイレギュラーを殺した。紅き翼のイレギュラーはもうすでに立ち上がる体力もなく、抵抗することすらできずに絶命した。

「さて、残るは貴様だけだな」

ソイツはあさぎの方に向き直る。

「二つ質問するよ？何故、他の幹部達にこのことを知らせなかったの？そして、ナギに対する対策は当然うってるんだろうね？」

もっともな理由だった。幹部達に知らせておいても別に問題はなかっただろうし、やられるかもしれない以上、対策は練ってあるのだろう。

「まあ、答えてやろう。さきに二つ目の質問だが、我々は必ずナギ・スプリングフィールドに敗北する」

「どうして？」

この場合のどうして？は対策をしてないことに対する言葉だろう。

「アレは物語の重要なファクターだ、彼が敗北しては物語は進まない。それゆえに抵抗などするだけ無駄だ……、だからこそ他の幹部にもこの事は言っていない」

「未来は確定していない！！ボクたちがいることが、お前たちの目的が変わっていることがその証拠だ！！お前も同じイレギュラーなら必死に足掻いて見せろ！！」

あさぎが叫ぶ。そう、原作がどうであれ彼等の目的が変わっている以上、まだ変えられる余地は残っている。

そしてあさぎはソイツに殴りかかる。

あさぎのパンチをソイツは回避することなく、そのまま食らった。

「ああ、お前のように真っ直ぐにいられたら抵抗もできただろう。でも、私はもう疲れた……」

「疲れた？」

「今から行ってもう間に合わん。だから、全てを語ってやる」

そうして、ソイツは語り始める。

「私の名はウェントス・A・K・マクダウェル、エヴァの兄だ……」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの兄ぃぃ！？」

あさぎは驚いているが、俺も驚いている。それはエヴァに兄がいるのもそうだが、何故完全なる世界に入っているかである。

「私はエヴァとは違い不老不死ではない。この身体も無理やり魔力で保たせているだけだ。直に死んでしまうだろう」

「……」

「それに私は迫害され続けた。正直、魔法世界の救済なんてどうでもいい」

「なら、なんで？」

「だからこそ、あの英雄たちに絶望を与えることで、この物語に、そして主人公たちに対する抵抗をしてやりたかったのだ」

そうしている間に、ソイツの身体の崩壊が始まった。

「もう、私は保たないようだ。一つだけ、頼まれてくれるか？」

「なに？」

「エヴァに兄は満足して逝ったと伝えておいてくれ、あいつは私が完全なる世界にいることも知らない」

「わかった。伝えておくよ」

そうして、そいつ……ウェントスは消え去った。最後にありがとうという言葉を残して……

そうしてあさぎは、また墓守り人の宮殿の内部へと向かう。

「アルさん！詠春さん！ラカンさん！」

「おお、無事でしたか！それで彼は？」

クウネルさんがあさぎの無事に微笑むがもう一人がいない事に気がつき、あさぎに聞く。あさぎは首を左右に振ることで、もう一人が死亡したことを伝えた。

「そうですか……、今はナギとゼクトがライフメイカーと戦闘中です」

既にナギとライフメイカーの戦いは始まっていた。

それを停めようとあさぎは動けないラカン、詠春、クウネルさんに全てを伝えた。

「なんですって!!それでは!!」

しかし、全てはもう遅かった。

ナギが造物主を倒し、混成部隊による封印術式が発動された。造物主が倒されたことで崩された術式の暴走を止めるにはこれしか方法はなかったのだ。

「浅葱くん、詠春、ジャック、このことは他言無用です」

「ああ、こんなことが世界にバレたらまた混乱が起きる」

そうして、このことはこの場にいる四人の秘密とされた。

これが世界にバレされたら、また世界の混乱が起こり、復興が進まないのが目に見えていたからだ。

◇

「これが大戦の真実です」

現実に戻った俺たちにあさぎは事実を告げる。

正直当事者でない俺ですら途轍もないショックを受けたのだ。当事者である彼らが受けたショックは計り知れない。

「まさか、『完全なる世界』が救済の為に動いていたなんて……」

明石さんたちもショックを隠しきれないようだ。

「これが嘘という可能性は？」

俺は当事者二人に質問する。確かに彼らの記憶ではそうだが、もしかしたらという可能性もあるからだ。

「あのあと、記録などを頼りに儀式に使われていた術式などを解析してみましたが事実でした。他にも調べられること全てをあたってみましたが、どれも大戦中に得た情報か僅かにこのことを示唆する情報だけでした」

クウネルさんが唇を噛み締めながら言う。やはり彼らにとってこのことはとても苦い事実のようだ。

「他にこのことを知っている人は？」

俺はクウネルさんに対して疑問をぶつける。

「私と浅葱くん、そして詠春とジャック、あとはクルトくんでしょうね」

「なぜ、そのメンバーだけが？」

「ナギは単純です。もしこのことを知ってしまえば、英雄として活

動できない可能性がありました。それは戦後の復興にとってマイナスになります。

そしてガトウとアリカ姫ですが、彼らの場合自ら死んでしまう可能性がありました。タカミチくんやクルトくんは英雄に対して強い憧れを抱いていたようなので、役に立たないと思ったからです。

現にクルトくんはこのことを知ってそれを覆そうと必死になっているようですし……」

そうしてクウネルさんとあさぎは溜め息を吐いた。おそらくクルトに対する呆れからだろう。

「なら、学園長たちは？」

「学園長は魔法使いの責任と云うものに対する信用も信頼もできないですし、学園の魔法使いはそもそも信用ができませんから」

「では何故、私たちをここに？」

夕子さんがクウネルさんに疑問をぶつける。確かに学園の魔法使いが信用できないなら、何故二人を呼んだのか

「まず、あなた達が涼くんから知識を得たということですね。これによって、他に情報を漏らさない為にもあなた達をこちら側に引き入れないといけませんでした」

「そして、ボクたちが行っていることのために人手が必要だったんだ、それにすずみクンを受け入れたあなたたちだったら、少なくとも他より信用できた」

あさぎがそう言うと、明石さんたちの身体から力が抜ける。
彼らから信頼を受けたということで少しは安心できたのだろう。

「やろうとしている事とは何かお聞きしても？」

「ええ、私達は現在『完全なる世界』の行おうとした儀式をもう一度行おうと考えています」

もう一度、魔法世界を救う為の儀式を行う。それは自分たちで儀式を停めてしまった罪悪感からかそれとも……

「でも、魔法世界を現実にしたとしても戦争の危険性が残らないか」

そう、超のいた未来では火星と地球とで宇宙戦争が起こっていた。
もし、儀式が成功したとしてもその問題が残る。

「それに関しての私達の解答がこれです」

クウネルさんから紙にまとめられた資料を手渡される。

「こっ、これは！？」

資料に目を通した明石さんから驚きの声があがる。

「そう、火星ではなく新しい世界に魔法世界を存在させればいいということです」

そうしてクウネルさんは続けた。

「昔から魔族達のいる魔界と呼ばれるものが存在しました。そして、浅葱くんや涼くんのような存在のお陰で、別世界の存在というのがあるということも認識しました。

火星に魔法世界を現界させればまた戦争が起きる可能性がある。ならば、火星ではなく、きちんとした異世界を作り上げ、そこに魔法世界を現界させればいいというのが私達の答えです」

異世界を作り出し、そこに魔法世界を存在させる。

「今現在、ラカンは魔法世界で資料や魔法具などの収集にあたっています。詠春は西の総本山で陰陽道などの視点から資料を私達はここで資料を集め研究を行っていますが、状況は芳しくありません」

それはそうだろう。世界を創るなんて神様がするようなことを人間が行うのだ。簡単にできるはずがない。

「ですから、あなた方にも手伝って頂きたいのです」

クウネルさんとあさぎが俺たちに向かって頭を下げる。明石さんや夕子さんは困惑しているようだったが、俺は既に答えが決まっていた。

「わかりました。お手伝いさせて頂きます」

そう言ってクウネルさんたちに頭を下げる。すると明石さんたちも頭を下げた。

「正直困惑していますが、できる限りのことはやりましょう」

「私も英雄の力になれることがあるかわかりませんが、全力で頑張ります」

そして、今ここで俺がこの世界でやるべきことが見つかった。

こうして、俺たちは魔法世界を救うという大きな目標に向かって歩むことになった。

第5話　相違点（後書き）

今回はどうでしたでしょうか。

展開が急すぎる気もしますが、楽しく読んでいただけたら幸いです。

感想等お待ちしています。

第6話　現実の重み（前書き）

ＰＶ１００００突破です。

皆さん本当にありがとうございます。

まだまだ未熟な私ですが、これからもよろしくお願いします。

第6話　現実の重み

俺たちがクウネルさんたちに協力をするようになってからは、俺の修行はクウネルさんとあさぎがつけてくれるようになった。

「“紅き焔”！」

“紅き焔”を空中に浮いてある魔法に当てる。

クウネルさんたちに修行をつけて貰い始めてからは、自分でも驚くほど魔法の技術が上達している。

しかしながら、修行は厳しくトラウマになりそうなほど、心身ともに追い込まれている。

「魔力が枯渇したらこれを飲んでね♪」

あさぎから笑顔で手渡されたのは修行を始めてから何度も目にした魔法薬である。

その効果は魔力の回復と増幅で飲む度に少しずつ保有魔力量が増えるらしい。しかし、増幅効果は子どもの時にしか効かないらしく、魔力が枯渇する度に飲まされている。

そしてこの魔法薬はあさぎが作っている。

あさぎのアーティファクト『錬金術師の工房』の効果だ。

『錬金術師の工房』は文字通り発動すると工房に繋がる。工房の中には作業台や炉、大釜などがある他、魔法関係に関する殆どの資料がある。さらにキッチンや寝室などの部屋などがあった。

あさぎによるとここでは魔法薬や魔法具など基本的に何でも作成することができるらしい。

俺が飲んだ魔法薬もその一部だ。実はこいつはエヴァに掛かってある“登校地獄”を解呪する魔法薬も作り、もう既に解呪している。

そしてそのエヴァはというと……

「さっさと次の詠唱をやれっ！」

クウネルさんたちと一緒に俺を鍛えています。基本的に夕方は自分の家でタカミチに別荘を貸しているみたいですが、夜になると図書館島に来て、俺を鍛えてくれる。

何故、エヴァがここにいるかというと、あさぎがエヴァの“登校地獄を解呪したは良かったのですが、魔法先生の反発や学園結界によって力が弱まっているため、学園長がここに留まれように言ったようだ。

しかし、学園の外に出る事もできるし、外に出れば魔力は元に戻るのだからあんまり意味はありません。

「まあまあ♪あんまり厳しくしちゃうと最後まで保たないよ♪

そして、あさぎとエヴァは仲がいい。エヴァに兄の最後について話した時から仲がいいらしい。

兄の最後を聞いたエヴァは大泣きしたらしい。まあ、一人しかいない身内が死んだのだからそれもわかる。

そして、エヴァはナギを探すのをやめたようだ。妻がいる人間を追う気にはなれないと言っていた。

それで仕方なく麻帆良にいるようにしたらしい。

麻帆良を守るのを手伝い、そして麻帆良にいる一般人には手を出さない変わりに学園長から報酬をむしり取ったと機嫌良く話していた。

そして、ここにはもう一人いる。

「“魔法の射手・連弾・光の七矢”」

裕奈だ。

明石さんが結局巻き込まれることになるならと、クウネルさんたちに魔法の指導をお願いした。

裕奈は俺ほど厳しくされてはいないが先生が良いためか、実力はついてきていると思う。

裕奈にはまだ何も話していない。というより、まだ幼いので話しても理解できないだろう。

ちなみに修行はエヴァの別荘であるレーベンスシュルトの魔法球で修行している。

始めにここを使った時は夕子さんが歳を取るのはやだとか言っていたが、あさぎが老化を遅らせる魔法薬を手渡すと寧ろ喜んで使うようになった。

魔法先生の仕事はストレスがたまるわ、纏まった休みがないわで旅行にも行けなかったらしく、下手なリゾートより優れているここはまさに楽園のようだと嬉しそうにしていた。

ちなみにあさぎを脅して老化を遅らせる魔法薬を強引に作らせていたのは、見なかったことにする。

そして、あさぎではあるが不老不死になったようだ。

儀式の研究過程でできた不老不死の魔法薬、それをコイツは何の躊躇いもなく飲みやがった。

ちなみに不死殺しの魔法具も作れるらしい。

どんなチートだよ……

あさぎはエヴァとも仮契約を結んだようだが、そちらのアーティファクトも同じものだった。

どうやら、桜咲刹那のようにアーティファクトを二つ持つには条件があるようだ。

そして、俺も仮契約をする事になった。それもあさぎとエヴァの二人と……

エヴァは弟子としての俺を最高傑作に仕立て上げたいらしく、自分

の弟子だと主張するために契約をする事になった。

あさぎは自分と同じ存在である俺との繋がりのためといっていた。

「では、始めますよ～」

クウネルさんが仮契約の魔法陣を展開させる。

「おいっ！それは契約方法がキスの契約陣だろうが！！」

エヴァがクウネルさんに怒鳴りつける。キス以外にも互いに祈りを捧げたり、血の交換や契約を唱えたりする方法があるというのは知っていた。

「私はこの魔法陣しか知らないもので（笑）」

「嘘つけぇ～！！顔が笑っているぞ！！」

どうせクウネルさんはエヴァをからかう為に態とやってるんだよなぁ……

仕方がないのであさぎとの仮契約を先に済ます。さすがに男とキスとはどうかと思ったが見た目は女っぽいので、女と思い込むことで何とか乗り切る。

エヴァも諦めたのか。渋々と納得いかないような顔をしていたが、ちゃんとキスしてくれた。

二人とも俺が『魔法使い（ミニステル・マギ）の従者』として仮契約したことで、パクティオーカードが二枚でた。

絵が違うことからどうやら、アーティファクトは二枚とも違うらしい。

エヴァのカードのアーティファクトは『管理者の掟』、これは『造物主の掟』と似たような形をしている。

形状で違うのが『造物主の掟』が杖だったのに対して『管理者の掟』はキーブレードの形状をしていた。

そしてアーティファクトの効果だ。

魔法世界を管理する『造物主の掟』とは違い、『管理者の掟』はある程度の法則などの操作、創造ができる。例えば時間を操ったり、魔法などの使用を制限したり、重力を一時的になくしたりなどを行うことができる。

しかし、幾つか制約がある。それは効果範囲と制限時間だ。

『管理者の掟』の効果範囲は使用者の半径三十メートル以内に限られる。

そして、制限時間だが一日十五分が限界でそれを過ぎるとカードに戻ってしまう。

その代わり、例えば新たに創った法則は使用者が解除しない限り消えないというとんでもない効果がある。

これが出た時はクウネルさんたちは驚いていた。これで儀式の研究が進むかも知れないと喜んでいた。

そしてエヴァだがどうやらこのアーティファクトはエヴァの兄、ウェントスが創ったものだったらしい。

そのアーティファクトが弟子である俺に出たということでとても嬉しそうだった。

そして、あさぎのカードからでたアーティファクトだ。

こちらのアーティファクトは『願いを叶える三本の糸』というアーティファクトでいわゆるミサンガだった。

効果はそのまんま三回願いを叶えることができる。しかし、使い切ると一年間、再使用ができなくなるらしい。

どこのドラゴンボールだよ。

ちなみにこちらを見たときクウネルさんが狂乱していた。それはそうだろう、今まで全くといっていいほどに進まなかった研究が一気に進むことになるのだ。

そして、それから先はこのアーティファクトの研究が開始された。

その結果幾つかできないことがあることもわかった。

一つ目は死者の蘇生

二つ目が世界の創造

三つ目が魔法世界を現実にすることであった。

もしこれらができるのであれば、俺たちの目的は達成されたも同然だったのだが……

しかし光明もあった。あさぎが俺のアーティファクトを解析することで、『完全なる世界』が行おうとした儀式は何とかできるようになるらしい。

それには時間が掛かるようだが、原作には間に合わせるよと真面目な顔で言っていた。

そして夕子さんの出張であるが、辞退したらしい。理由を聞くとこちらに関われなくなるのが嫌だったという。

出張は変わりにタカミチが行ったようだ。

これは正直嬉しかった。

夕子さんは大切な家族だ。死んでしまう可能性があるような危険には今はまだ、関わってほしくない。

◇

修行を始めて数ヶ月が経ち、二度目の小学生生活を迎えた日のこと、クウネルたちに呼び出される。

あまりに厳しい修行に呼び方もかわってしまった。

呼び出された場所にはクウネル、あさぎ、エヴァの三人がいた。

「涼くん、あなたには浅葱くんとともに魔法世界に行って貰います」

クウネルがいきなり俺に告げる。

「魔法世界に行ってジャックと会い、そして魔法世界を見てきなさい」

「しかし、魔法世界はそれなりに危険だ。いくら私という最高の師のもと、お前の力がついてきたとはいえ、まだ弱く覚悟も足りん」

「だから、少し現実を見せてあげようとおもってね♪」

クウネルは俺に夢見の魔法を掛ける。

そこで見たのは地獄絵図だった。

魔法に撃ち抜かれ死んでいく人。

魔法の余波で手足が吹き飛んでいる人。

鬼神兵に押し潰される人。

戦艦が墜とされ死んでいく人。

広域殲滅魔法によって肉片となった人。

凄惨な光景であった。

「これが大戦の事実です。当然これに参加していた私達はこれを行ってきました」

そう、これは戦争なのだ。戦争で大勢の人間が死ぬのはバカでもわかる。しかし、この光景は体験した者しかわからない。

「この世界において、魔法による事故死などは殆どありません。死亡理由の殆どが殺人です」

「お前がいるのはそんな世界だ。誰かが明確な意志をもち誰かを攻撃する」

そして殺し殺されるとエヴァが言う。

「お前もこの世界に関わる以上こういう目に遭うだろう」

その瞬間、夢見の世界が壊れ、何者かに襲われる。

襲ってきた相手を見ると、それは悪魔だった。

「私が召喚した悪魔だ。お前を殺すように言ってある。殺されないように気をつけろ」

エヴァたちはそう言ってその場から消える。そして俺と悪魔だけが残る

「があぁぁぁ！！！」

悪魔が襲いかかってくる。そのスピードはかなり早く、反応が間に合わない。

悪魔が振るった腕が障壁を破り俺を直撃する。

そのまま、悪魔の攻撃を喰らい続ける。訓練の時では反応できた攻撃も、今は反応すらできない。

これが本当の戦いで、これが命のやり取りをするということだった。

現実を知る。戦いを知る。そしてこの世界を理解した。

恐怖と痛みで竦む身体に喝をいれ、意識を切り替える。

相手は自分を殺そうとしている。

この世界にいれば、今後もこのようなことは何度もあるだろう。

その時、今のように抵抗もできないようでは自分が死んでしまう。

――殺られる前に殺れ

身体から魔力を解放する。

解放した魔力に悪魔が一瞬怯む。

その瞬間、瞬動で一気に距離を詰め、“断罪の剣”で一気に切り裂いた。そして、直ぐに距離をとり

「“紅き焔”！！」

魔法をぶつける。更に追撃で“魔法の射手”を連続で放つ。

しばらくすると悪魔は完全に沈黙し、消えていった。

これが人間だったら、俺も人殺しになるのかなぁ

「よくやった」

エヴァが現れる。ずっとどこかで見ていたのだろう。

「覚えて置いて下さい、これが実戦です。そして私達は何時でもこのような世界の住民だということを自覚しなさい」

クウネルは言う。この世界は危険なのだと、実戦では甘い考えは捨てろと……

もう既に今回のことで俺は理解した。自分たちがどれだけ危ないのか、どのような危険があるのか……

まだ手には悪魔を切った時の感触が残り、屠ったときの光景が頭に焼き付いている。

悪魔とはいえ、殺したという事実に身体が恐怖する。

しかし、それも一時的なものだった。あのような巨大なものを、人型をしたものを殺したのは始めてだったが、大戦の光景を見たためか思っていたよりの衝撃的な感情は湧かなかった。

まあ、人を殺すのはまた別なのだろうけど……

こうして、俺は少しずつ知っていった。

第6話　現実の重み（後書き）

やっぱり文章の表現力にまだ難があるな～

展開も急な気がするし、やはりまだまだだな～

第7話　英雄の実力（前書き）

ついにあのバグキャラの登場です。

第7話　英雄の実力

魔法世界に行くことが決定してからというと訓練は一段と厳しさを増した。

まだ幼い俺の身体では圧倒的にリーチが足りない。それ故に近接戦闘の技術はカウンターや一撃離脱、瞬動だけに絞り鍛える。

武器を扱うことも考え、いくつかの武器を試してみたが、どれも才能がないのか、上手く扱えない。

銃では的を外し、反動を上手く抑えられない。

剣や刀では振るうときに刃が綺麗に通らない。

エヴァの使っている糸は繊細すぎて扱えない。

唯一扱えるのが短剣だけであった。これなら軽く魔力を纏わせるだけで威力は上がる、“断罪の剣”を短剣の先から出すことでリーチ差も短くなる。

ということで、短剣の修行はチャチャゼロが相手だ。

「ケケケ、ヨケネェト首ガ飛ブゼ」

「ちぃ！」

首を狙ってくる刃物を躱し、即座に短剣から出した“断罪の剣”で

斬りつけるが躱される。

今両手に短剣を持っているが右手の短剣しか、“断罪の剣”を展開させていない。

魔力を節約するというのもあるが、まだ完全に両手には展開できないからだ。

「行クゾ」

チャチャゼロの攻撃を右手で受けるが、威力が強すぎて右手に持つ短剣が弾かれ手から離れる。

とっさに左手の短剣でチャチャゼロを迎え撃つがやはり躱され、目の前に剣を突きつけられる。

「ケケケ、マダマダダナ坊主」

チャチャゼロはそう言って、剣を下ろす。何手かは打ち合うことができるようになったが、基本スキルの足りない俺では、まだまともな勝負にはならない。

「まだまだだな、近接戦闘のみの制限があるとはいえ、お前にはチャチャゼロに勝てるくらいにはなってもらわないとな」

エヴァが俺たちの前に現れるがその顔はまだまだ物足りなさを感じているようだった。

「まあ、私達ではお前に教えられる近接戦闘を限りがあるのも事実だ。そういう意味では今回魔法世界に行き、ジャック・ラカンに会

うというのは貴重な経験だろう。アイツは加減などできないからな、しっかり揉んでもらえ」

エヴァはそう言うとチャチャゼロを連れて立ち去って行く。

「まあ、今回の魔法世界訪問は君にとって良い経験になるでしょう」

「そうだね♪それにボクも一緒に行くし、安心していいよ♪」

クウネルとあさぎが現れる。そう俺は明日から二週間の間、魔法世界に行くことになる。その後はこちらに戻ってきて、二週間京都にある関西呪術協会にお世話になることになる。

関西呪術協会に行っても大丈夫かと思ったがあさぎは関西にお世話になっていた時もあるらしく、俺はあさぎの弟子という扱いなので大丈夫らしい。

俺も魔法世界に行くのも京都に行くのも楽しみだった。

◇

～早朝～

「じゃあ、気をつけるんだよ」

「大丈夫だとは思うけど、無理はしないでね」

「涼くん～、わたしも魔法のれんしゅうがんばるから～」

そして、魔法世界への出発を迎えた。

家の前では朝早いのに明石家のみんなが出て見送ってくれる。こういうのが家族って感じがして自分の口元がほころぶのがわかる。

「じゃあ浅葱くん、涼くんのことを任せたよ」

「はい♪任せてください♪」

あさぎはこういう時でもいつも通りだった。変わらないコイツを見てるとなんか安心する。

「じゃあ、行ってきます」

そして俺たちは魔法世界に向かう。

◇

今回使うゲートは中国にあるゲートで、繋がる先はメガロメセンブリアで今日の夕方には繋がるようだ。

昼にはゲート近くの街についたので、ゆっくりと昼食をとる。

「なあ、あさぎ」

「ん？」

「魔法世界やこっちで他に変わったかもしれないところとかはわか

らないのか？」

あさぎにふと疑問に思ったことを聞いてみる。今までコイツらに聞いたのは、原作と違うところだけだ。もしかしたら原作に描かれていない点でも少しは違っているかもしれない。

「う～ん♪まずはメガロメセンブリアかな♪大戦は彼らが起こしたってことと、あの大戦では『完全なる世界』は人命救助をやっていてね♪ボクたちが『完全なる世界』だと思っていたのはメガロメセンブリア元老院の末端が勝手に『完全なる世界』を語っていただけだったんだよ♪」

「つまりラスボスはＭＭ元老院ってわけだ、なんとまあわかりやすい」

コイツらが倒した殆どがＭＭ元老院の関係者か。戦争の発端はもう知っているが……つまり

「まあ、結局彼らも魔法世界の住民の殆どが幻想ということは知っているからね♪

あの時、封印術式が成功したから元老院は今も魔法世界人たちを見下せるし、もしあの術式が失敗してしまえば、今まで見下していた存在が自分たちと同じ存在になる♪

でも儀式が失敗することで魔法世界の崩壊の危機に陥ったからアリカ姫を処刑しようとしたわけ♪」

「結局、アリカ姫はどうなろうと処刑はされそうになるということか」

封印が成功しても元老院に捕まり、失敗して『完全なる世界』の目的が明るみになれば、それを停めようとしたとして処刑されただろう。

「不幸というのはまさに彼女のためにある言葉だな」

どんなに頑張っても自分は不幸になる。他人を救うためにした努力が無駄であった。これを彼女が知ったらどう思うか……

「だからボクたちは真実を教えなかった。知らないことが幸せなこともあるから」

「……まあ、結局俺たちはできることしかできないけど」

「なら、もっと強くなってもらわないとね♪今のキミじゃまだまだ足りないよ♪」

「うるせー」

こうして俺たちの昼食は進んでいった。

魔法世界に到着し、グラニクスに転移魔法を使いグラニクスの近くにあるラカンの住処に転移する。

「すみません～♪ジャックさんいる～♪」

あさぎは相変わらず軽い言葉使いでジャック・ラカンを呼ぶ。

「おおっ、来たか浅葱！！」

「お久しぶりです♪」

すると建物の方からデカい男が出て来た。

「そっちが例のガキか？」

「そうですよ♪ボクたちの切り札になります♪」

「司条涼です。よろしくお願いします」

するとジャック・ラカンは俺の背中を叩く。

「ハッハッハ、堅苦しい喋り方はやめていいぞ、お前も浅葱たちと同じなんだろーが」

背中が痛いが我慢する。まあ、こう言っているのだから遠慮することはないだろう。

「じゃあ、先に今までのことを崩壊するね♪」

そう言ってあさぎはラカンにどこまで研究が進んでいるのかを報告する。

俺のアーティファクトの存在で一気に進んだとはいえ、まだまだ完全なものにはほど遠い。

世界を創り、魔法世界をそこに移す。言葉にすればただこれだけだがその内容は想像を絶するほど難しい。

「なるほど、なら俺はこれまで通り世界を創る方法を探せばいいんだな」

「はい♪、あと様々な材料や書物の収集もお願いしますね♪」

この辺りラカンは真面目なのだろう。真剣な表情で話しを聞いている。

話しが終わるとラカンと俺は何故か戦うことになった。

「お前を鍛えてくれと頼まれているからな、まずお前の力をみせてくれや」

ラカンの言葉とともに俺は短剣を構える。残念ながらアーティファクトはどちらも使用禁止をクウネルたちから言われているので使うことができない。

短剣から“断罪の剣”を出し一気に距離を詰めて斬りつけるが、そもそも刃が通らない。

ラカンがパンチを放ってくるので、それを瞬動で回避すると地面にクレーターができる。

直撃したら確実にアウトだな……

冷や汗が背中と頭に流れる。気のせいか体温が二度くらい下がったように感じる。

ヒットアンドアウェイを繰り返し魔法も混ぜるが有効的なダメージは与えられない。

それどころかラカンの攻撃を回避するたびに体力と精神力が削られていく。

「“魔法の射手・戒めの風矢”！！」

このままでは埒があかないので捕縛魔法を使い足止めを行い距離と時間を稼ぐ。

「契約に従い我に従え炎の覇王、来れ浄化の炎、燃え盛る大剣」

稼いだ時間を使い詠唱するが、ラカン相手ではそうは保たない。既に捕縛はとかれ、ラカンは瞬動を使い近づいてくる。

「ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄、罪ありし者を死の塵に」

「ちぃ！！間に合わねぇか！！」

ラカンが攻撃する前に詠唱が完了する。それをありったけの魔力を込めて解き放った。

「“燃える天空”！！！」

“燃える天空”はラカンを直撃したが、まだ倒したわけではない。

「光の精霊５９柱、集い来たりて敵を射て“魔法の射手　連弾・光の５９矢”」

追撃で魔法の射手を放つ。しかし……

「追撃はいい事だが、ちゃんと相手を見ないとなぁ」

ラカンは後ろに回り込んでいた。そして、ラカンの右パンチをまともに喰らい、俺は意識を失った。

◇

「どうだった♪涼クンは？」

ボクはラカンに涼クンの印象を聞いてみる。ボクとしてはヒットアンドアウェイでダメージを入れられなかったことから、捕縛魔法で時間稼ぎを行い、イチかバチかの大技を決めにいったのは上出来だった。

「まあ、捕縛から大技までの流れは上等だったな、いくら俺様が手を抜いていたとはいえ直撃させたんだから上出来だろ」

どうやらラカンも同意見のようだ。今回ラカンは実力の殆どを出していない。もし本気であったなら、最初の一撃で終わっていたと思うし、捕縛も直ぐに外せたハズだ。

ただ、まだ小学一年生の涼クンがラカンに一撃を入れた事には驚いた。

そして“燃える天空”まだ上位の魔法は教えなかったにも関わらず彼は使った。

おそらく、どこかで練習をしていたのだろう。

「まあ、これから何処まで伸びるか楽しみな奴だぜ」

「ふふ、そうだね♪」

ボクと同じイレギュラーである彼は重要な役割を持っている。

だからこそ……

「ボクも頑張らないとね♪」

「ああ？なんか言ったか？」

「ううん、何でも♪」

少しだけ、未来が楽しみになった。

◇

目を覚ますとベッドに寝かされていた。どうやらラカンの攻撃をまともに喰らい気絶したようだ。

あれが英雄の実力か……

わかるように手加減された状態で手も足も出なかったのだ。

わざわざ隠れて練習して覚えた“燃える天空（きりふだ）”ですら、ジャック・ラカンには通用しなかった。

「おおっ、もう起きたのか」

様子を見にきたラカンが声を掛けてくる。

「まあ、お前もよく頑張ったが、まだまだこの俺には勝てねえよ」

ラカンは自慢するように言った。

「とりあえず、こっちにいる間は鍛えてやる。ついでに拳闘大会に出て実践を積んでこい。じゃあ、大丈夫そうだから外に出な」

そう言ってラカンは俺を外に連れ出した。

「まあ、お前の場合基礎はできているみたいだが、全て小手先の技術なんだよ」

ラカンは俺の戦闘方法の考察を述べる。

「確かに戦術の面ではそこそこできるが、俺たちのような格上の存在相手には圧倒的に火力が足りない。現に“燃える天空”も防がれただろ」

ラカンの言う通りだった。断罪の剣で近接戦闘ができるようになっても戦いのバリエーションが増えただけで、根本的な火力不足を補うことにはならない。

そのための“燃える天空”だったのだがこうして防がれたことを考えると更に火力を上げる必要がある。

「純粋に“燃える天空”のような上位の魔法を覚えたり、鍛えて威力を上げたりもしてやってもいいが、ここはやっぱり必殺技だろ！！」

ラカンはそう言って、ホワイトボードにいろいろ書き込む。

「とりあえず、こっちにいる間に俺の防御を超えてダメージを与えられるような必殺技をつくれ！！」

こうして俺は魔法世界にいる間に必殺技を作らなければならなくなった。

第7話　英雄の実力（後書き）

というわけでラカンの登場です。

彼は好きなキャラなんですが、今の作者の力量では彼を表現するのはこれが限界です。

ですから、もっと精進できるように頑張ります。

ここで一つ、皆さんに質問があるのですが、皆さんがネギまで好きなキャラクターは誰でしょう？

書いていただけたからといって、そのキャラクターの登場頻度が多くなったりはしません。

純粋に作者の興味で皆さんに質問しています。

感想欄に好きなキャラクターとその理由、できればこの作品の感想などをご記入ください。

ちなみに作者は前述した通りラカンが好きです。

男らしさや面白さもあり、いろいろと理屈を超越した存在ですし、ラカンのこと嫌いな人っているんでしょうか？

長くなりましたが、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第8話　必殺技ってゲームじゃ使えないって感じるのもあるよね？（前書き）

主人公の必殺技の完成です。

……原作突入までまだまだあります。

第8話　必殺技ってゲームじゃ使えないって感じるのもあるよね？

魔法世界に来てから一週間、拳闘大会に出つつも必殺技を考える日々が続いた。

拳闘大会では未熟な俺では拮抗、もしくは格上の相手が多かったがラカンのように攻撃が通らないというわけではなかったので、絡めを使ったり、エヴァたちに鍛えられた機動力や防御力のお陰で苦戦はするものの何とか勝利を収めていった。

あと、六歳の拳闘士ってことで何度か取材を受けたが、適当に流しておいた。

しかし、一度だけ負けた試合があった。

その日は一日二試合入っていて、先の試合で格上と大戦し辛くも勝利を収めたが魔力を大量に消費し、次の相手が一試合目より更に格上だった為、終始粘ったが結局そのまま押されて負けてしまった。

その際、身体の骨が折れたりしたが、意外と大丈夫だった。

どうやら俺もこの世界に染まってきているようだ。

そして、俺が負けた相手はトサカだった。

まさか、原作に出てる奴と戦う事になるとは思っていなかったが、まさか負けてしまうとは。

トサカは原作での実力を見る限りそれ程高くないように思えたが、攻撃力が高く、俺より遥かに実戦慣れしているため、試合を巧みに進められた。

そして試合後にラカンとあさぎが治療している俺の見舞いをしに来たときに、ちょうどトサカも居合わせ、ラカンからサインをあさぎからはマジックアイテムを貰っていた。

あさぎのマジックアイテムは魔法世界では一種のブランドとなっているらしく、高値で取り引きされていると本人から聞いた。

トサカはあさぎからマジックアイテムを貰うかわりに俺たちがここにいる間、俺の組み手の相手をしてくれることになった。

何でも、あさぎやラカンでは実力が離れ過ぎていて練習にはならないらしい、だから、俺より実力が上でさらに巧みに闘うことのできるトサカに相手を頼んだようだ。

トサカ……今はトサカさんと呼んでいるが、彼も快く引き受けてくれた。

お陰で近接戦闘の技術が伸びるが、何故かトサカさんも一緒に鍛えられていて、一向に差が縮まっていないように思える。

そして今はラカンと対峙している、完成した必殺技を見せるためだ。

「じゃあその新しい必殺技を撃ってみろ」

ラカンは気を放出して防御を高める。

俺はというと右手に持った短剣から“断罪の剣”出して剣道でいうところの上段から更に剣を寝かせた形で構える。

「まさか、それを思いっきり放つとかじゃねえだろうなあ」

ラカンが俺の構えから推測したのか呆れたように言う。

確かに間違ってはいないがまだいくつか工程があった。

“断罪の剣”の術式を書き換える。すると魔力でできた刃が書き換えるられて、術式で作られた刀身が現れる。

“神斬の太刀”

これが俺の新しい必殺技だ。

魔力を刀身に注ぐと刀身が巨大化する。これにはラカンも、そして近くで見ているあさぎ、トサカさんも驚いている。

「壱の太刀“地砕き”！！」

「やべぇ！！！」

そして思いっきり振り下ろす。振り下ろした太刀はラカンを直撃し更に地面を粉砕する。

思ったより威力が低い……まだ練度が足りないのだろう。

俺はまだまだ威力に納得していないが、ラカンが全力で気合防御し

たのだ。おそらくまともなダメージになっていないだろう。

土煙と水煙は晴れ中からラカンが出てきた。案の定大したダメージではないようだ。

「充分だな、まさか俺の全力の防御を超えるとは恐れ入ったぜ」

「そうですね♪あなたがあれだけ焦ったのも久しぶりに見ましたよ♪」

どうやら俺の攻撃はラカンにダメージを与えることは出来たようだ。しかし腕に少々の切り傷を負わせただけだったが……

「まあ、まだガキだからな、もっとデカくなりゃあ更に威力も上がる」

こうして俺の必殺技は完成した。

正直に言えばもっと広範囲に特化した魔法を創りたかったが、今はまだこれで充分だろう。

そしてこの日から一つ変わったことがある。

トサカさんがラカンに弟子入りした事だ。俺の必殺技を見て触発されたらしい。

俺に対して、絶対負けてやらねえなどと言っていた。

こうして二週間の魔法世界での生活を終えた俺たちは旧世界に帰った。

グラニクスを出立するときはトサカだけでなくチーフたちまで見送ってくれた。

魔法世界では実戦をこなす事で大分実力はついたと思う。

しかし、終始トサカさんには負け続けたんだが……

ただ、魔法世界では全然暮らし方が違う。メガロでは近代的な生活もあり現代の日本に近かったが、グラニクスはどちらかというと中東の国々に近いイメージがある。

魔法が公になっているぶんだけ、便利な面もあるが危険という面ではこちらの方が危ない。

しかし、ここには笑顔が溢れていた。日本のように堅苦しく冷たく感じるような社会ではなく温かみがあった。

俺たちはこれを守らないとならない。

「これが魔法世界だよ。ボクたちが守り、救わなきゃいけない世界」

あさぎが真剣な表情で呟く。

「ここにいる人たちはボクたちと何にも変わらない。だから、ボクたち『紅き翼』があの儀式を停めたとき、この世界を救うチャンスを一度逃したんだ」

あさぎは悲しそうな表情をしている。それは懺悔のようにも聞こえた。

「もし魔法世界が崩壊すれば、間違いなくそれは『紅き翼』のせいだろうね。だからこそボクたちは、この世界を救うために頑張らないといけなかった」

「『紅き翼』の責任がどうとかは別にいい」

あさぎの話しを打った切って俺はあさぎに言ってやる。

「少なくとも俺はお前らが魔法世界を救うと言って、その手段を聞いて納得したから手伝っていた」

本音を言うとこれまでは魔法世界がどうとか紅き翼がどうとかはあまり関係なかった。

ただ、より良くなる可能性があるこちらを手伝っていただけだ。

確かに思わない所がないわけではないが、自分に取っては過去のことで実感はなく、明確な意志があるわけではなかった。

……魔法世界に来るまでは、

「俺は今回魔法世界に来てトサカさんたちに会った。あの人たちを救いたいからこそ行動する。お前らの罪がどうとか知ったことか！」

更に続ける。

「義務感や罪悪感で救うなんて言うな！！お前らは英雄なんだろう！！なら助けたいから助ける、それでいいだろうが！！」

「うん……そうだね」

あさぎの顔に笑顔が戻る。

「うんうん、そうだよね♪やっぱり義務感や罪悪感で世界を救うなんて間違ってるよね♪」

「切り替えはえぇなおい」

あさぎはさっきの真剣な状態から、何時もの明るい状態に戻る。コイツのシリアスなんて似合わない。何時も調子に戻ったことでホッと一安心する。

「涼クン♪」

「なんだよ？」

「……ありがとうね」

「どういたしまして」

こうして俺たちは魔法世界をあとにして、京都に向かう。

◇

京都につき、関西呪術協会にたどり着くとそこではたくさんの巫女さんが出迎えてくれた。

そして今は謁見の間にいる。

「お久しぶりですね♪詠春さん♪」

「お久しぶりです浅葱君。そしてはじめまして司条涼君」

「はじめまして詠春さん。やはり俺のことはご存知で？」

目の前にいる近衛詠春はやはり少し老けていて、顔も少しやつれている。

「ええ、アルとも連絡はよくとっていますから」

どうやらクウネルとの連絡で俺のことを知ったようだ。

「それに聞いていますよ。あのジャックに一撃を与えたと」

さすがに情報が伝わるのが速い。

「ここでは何ですから私の部屋に行きましょうか」

そう言って詠春さんは俺たちを自分の部屋に案内する。本来であれば許されないことで止められてもおかしくはないが、あさぎは関西にそれだけの信用を得られているのだろう、素通りだった。

詠春さんの部屋に行くと儀式の研究の進行具合についてあさぎが報告する。

詠春さんは頷きつつも難しい顔だ。やはり神経質な性格がここまで

思い悩ませているのだろう。

報告が終わると話題は変わり、関西呪術協会と近衛木乃香のことに入る。

「関西呪術協会は私が陰陽道の研究をしているためか術者の力量が全体的に上がってきています」

「??、それはいいことじゃないんですか?」

術者の力量が上がることは組織としては問題ないはずだ。

「はい、確かにいいことではあるのですが……」

「過激派だね?」

「そうです。過激派の力量も上がってしまい、一部では関東に攻め込もうとする輩も増えています」

それは問題だった。学園結界によって高位の鬼などが呼ぶことができないから大丈夫かとおもっていたが、陰陽道は式紙だけではなく、符術もある。

それにヘルマンが原作で侵入できたことを考えると学園結界はあまり意味をなさないだろう。

関西自身は詠春さんが儀式のためとはいえ陰陽道の研究を行うことで全体の力量が上がったため、詠春さんの立場や発言力も増しているがそれでも全体を纏めるには至っていない。

「そう言えば木乃香ちゃんはどうしたの♪」

「木乃香は麻帆良に通っています。魔法についても教えていません」

どうやら近衛木乃香はすでに麻帆良にいるらしい。しかし、魔法を教えてないのは何故だ。

「ここにいては魔法について知る機会が作られる可能性があります。それに麻帆良にはアルやエヴァもいますし君たちもいますから安心ができます。

魔法について教えてないのは、日常にも選択肢があることを教えるためです。魔法に関わっているとこちらにしか目がいきませんから……」

詠春さんは親としてよく考えているようだった。確かに木乃香の才能であれば多少スタートが遅れても一流の術者になることは難しくないだろう。

「そして二人にも木乃香の護衛をお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？もちろんずっととは言いませんし、報酬も支払います」

「いえ、報酬は」

貰うわけにはいかないと言おうと思ったが詠春さんが、

「これは正式な依頼ですし、報酬を支払うことで君達には責任を負って貰います」

と言う。そう言われてしまえば、断るわけにはいかない。

「わかりました～♪」

「謹んでお請けします」

二人で対照的に返事をする。詠春さんは満足そうな表情だ。

「期限は木乃香が中等部に入るまでになります。その時に魔法についてを木乃香に教えるので、その時にはまた指導などを頼むこととなるでしょう」

「木乃香さんには全てを話しても？」

「はい、構いません。これは妻と出した答えですから」

詠春さんはその選択に後悔などはないようだ。

そのあとも話しは続くがどうやら儀式や大戦の真実について詠春さんの妻、木乃美さんは知っているらしい。

と言っても知っているのは詠春夫妻だけのようだ。

話し合いが終わり、詠春さんが用意してくれた宴に参加する。

出てきた料理は絶品で、周囲にいる巫女さんたちも綺麗な人ばかりだったので十二分に満足して、その日が終わった

第8話　必殺技ってゲームじゃ使えないって感じるのもあるよね？（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。

第9話　基礎は大切ですね（前書き）

更新予定日の投稿です。

第9話　基礎は大切ですね

京都に来てからは神鳴流の道場に通わせて貰っている。

とは言っても神鳴流の技を教えて貰っているわけではなく。刃物を使った戦い方の基礎を教えて貰っている。

一度ここの師範代と試合をさせて貰ったが、武器の取り回しは軽く短い分こちらが有利かと思ったが、斬りかかっても完全に見切られ、技を放とうとするとその前に攻撃をいれられた。

横で見ていた詠春さん曰わく、歩法や瞬動はまずまずだが、そもそも武器の扱いが雑とのことだ。

瞬動で懐に潜り込んだときの短剣の振るいかたが上手くないらしい。

素手での格闘術は違和感なく力を伝えることができるが、短剣を持つと動きがぎこちないとは師範代さんの言葉だ。

というわけで武器の扱い方を一から習っている。

短剣の使い方、“断罪の剣”を使ったときの使い方、そして二刀流……

基本的な動きを身体に叩き込む。

これをやっているとチャチャゼロやラカンがどれだけ大味な戦い方

だったのかがわかる。

今は一撃一撃意識して振っているが、無意識でもできるようにならないと実戦では使えない。

練習をしているうちに初撃は上手くいくようになったが、連続して短剣を振るとまだまだ剣筋が上手く通らない。

これは反復して身につける技術なので一朝一夕でできるなんて思っていない。

そして反復を繰り返す。

唐竹（からたけ）

袈裟斬り（けさぎり）

右薙（みぎなぎ）

右斬上（みぎきりあげ）

逆風（さかかぜ）

左斬上（ひだりきりあげ）

左薙（ひだりなぎ）

逆袈裟（さかげさ）

刺突（つき）

何度も何度も身体に身につくように、手に持った短剣を振る。
右手、左手、あるいは両手で日が暮れるまで振り続けた。

神鳴流の師範代さんに負けたのは単純に一つだけを学び研鑽を続けた者と俺のように魔法や武器など複数の分野に手を出し半端になってしまった者の差であった。

言い訳をするなら、魔法を使用することができるなら師範代さんであれば、あれほど簡単には負けなかったと思う。

しかし、制限があったとはいえ負けてしまったことはかなり悔しい。

だから、次は負けたくない。

「神鳴流を学んでないくせに生意気なんだよ!!」

俺は今、神鳴流の門下生数人に囲まれている。

門下生との試合では、年上が相手でも負けることはない。

それは外を知っている俺と知らない彼らの差であろう。しかし、彼らは自分より年下の子どもに負けるのは我慢がならないようだった。

彼らも神鳴流という流派に誇りを持っていて、神鳴流の技を習わないのに道場にいる俺が気に入らないらしい。

見たところ八人がいて手には木刀を持っている。

「余裕ぶっこいてんじゃねえ!!」

一人が斬りかかってくるが、気もまともに通っていない木刀などぬる過ぎる。

木刀を叩き折って、顔面に蹴りを入れる。

「ぐわあ！！！」

そして近くに二人に魔法の射手を撃ち込んだ。

「うわあ！！！」「がはっ！！！」

まだ未熟なのだろう。二人は避けることも迎撃もできないまま直撃を喰らった。

「“氷爆”」

めんどくさいので残り全員に魔法を放つ。一人には回避されたが他の四人はこれで気絶した。

「まだやるの、これ以上やると君たち破門になるんじゃないか？」

そもそも負けた腹いせに複数人で相手に掛かろうとしているあたり問題であるし、俺は関西にとって客人である。何より……

「俺が関西の客人だということを忘れてないか、それにそんなみっともない所をそこにいる人に見せるつもりか」

そう言って木を指差すと人が現れる。

そこにいたのは長い黒髪が綺麗な和服美人だ。

「こ、木乃美様」

「何をやっておるのですか？」

「い、いえ。これはですね……」

「言い訳は無用です。追って処分を伝えますので、覚悟なさい」

「はいぃぃ」

俺を襲ってきた門下生たちが、仲間を抱えて逃げる。

美人ながらその様は怖い。

「まったく困ったもんやなぁ、客人に対する礼儀すらなっとらへん」

「まあ、俺はケガはないですし、あの程度なら問題ないですよ」

「強いんやなぁ。門下生とはいえ八人を相手にしてあの程度なんて」

木乃美さんはくすくすと笑っている。

「どうせやったら、木乃香と婚約せぇへん？あの娘はうちに似て美人になるえ～」

「考えておきます」

確かに木乃香の婚約者というのはおいしい話しではあるが、冗談で

言っているのがわかるのだ。素直にはいなんて言うわけがない。

「まあ、ええんやけどね」

木乃美さんは少しつまらなそうだ。

「後であの子らの処分も伝えるから、楽しみにしとくんやで～」

いや楽しみって

木乃美はなんというかイタズラ好きというか少々子どもっぽい面がある。

ただ、組織を纏める人間としては一流で公の場ではその美貌も相まって、一種のカリスマ的役割を果たす。

今現在、関西呪術協会が曲がりなりとも纏まっているのはこの人のお陰であろう。

後日、俺を襲ってきた奴らがかなり厳しい目にあったというのは師範代さんから聞いた。

◇

今俺は師範代さんと向かい合っている。

既にここに来て十日、十五歳以下の門下生は殆ど倒した。

他は戦わせてくれないので、もう一度師範代さんに勝負を挑んだのだった。

「では、はじめっ！！！」

審判の合図とともに斬りつけるがやはり受け止められてしまう。

瞬動を使いすれ違い様に何度も斬りつけるが全て反応され、迎撃される。

「いや驚いた、まさか基礎を教えるだけでここまで伸びるなんて」

師範代は驚いてはいるが余裕の表情だった。

その余裕がムカついたので刀身から“断罪の剣”を出す。

ここからが本番だった。

短剣を振るい、師範代さんに向かって魔力を込めた斬撃を飛ばす。

当然斬撃は迎撃されるが、その瞬間に後ろに回り込むが、師範代さんは振り返りざまに斬りかかられる。

それを屈んでで躱し、師範代さんに蹴り込んだ。

師範代さんは蹴りには反応できずにまともに喰らう。

これが師範代さんにまともに与えた始めてのダメージだった。

「ふふ♪やっぱり涼クンはすごいね♪」

「あれでまだ六歳とは恐れ入るな」

「やっぱり木乃香のお婿さんになってほしいわ～」

師範代さんが起き上がる前に短剣を突きつける。

「やめっ！！勝者司条っ！！」

道場内でどよめきが起こる。俺が勝利したのが意外だったのだろう。

確かにまだ続けることはできただろうが、あの場面で一応、俺の勝ちは決まっていた。

「さすがだったね涼君、では次は私とやろうか」

師範代さんとの試合が終わり互いに挨拶を終えると次は詠春さんと対峙する。

詠春さんは木刀だがその気迫はさすが英雄と言えるものだった。

ガキィン

審判の合図を待たずしてお互いに打ち合う。

流石は英雄だ。全く隙が見えない。

「鍛錬は欠かしていませんから、技は衰えていませんよ」

「よく言うよ♪衰えているどころかキレがましてるのに♪」

詠春さんの攻撃は早いがこっちが反応できるギリギリまで手を抜いてくれている。

正直出し惜しみをしたくなかったので距離をとると、“神斬の太刀”を展開する。そしてその場で魔力を込め、詠春さんに向かって振るう。

「弐の太刀“空裂き（そらさき）”」

この技は“地砕き”とは違い斬撃を飛ばす。その威力は“地砕き”には少し劣るがかなりの高威力だ。

この技にはかなりの自信があった。

「斬魔剣！！」

ただ、英雄には通用しなかった。魔力で作られた斬撃を詠春さんは斬る。ダメージは欠片も見られない。

「斬空閃！」

“空裂き”の反動で力の入らない身体に詠春さんの放った“斬空閃”が直撃する。

結局、詠春さんには一撃も入れることはできなかった。

まだまだ英雄を相手をするには力量が足りないようだ。

この日からは詠春さんが稽古をつけてくれた。詠春さんはスパルタでこちらの限界ギリギリで訓練を行う。

こうして、京都での二週間が終わる。

このひと月、詠春さんとラカンのお陰で近接戦闘の技術は目を見張るほど成長したとあさぎに言われるが正直自信がない。

詠春さんやラカンさんは言わずもがな、師範代さんやトサカさんにも勝利したわけではないからだ。

師範代さんは一本を取ったものの完全な勝利を収めた訳ではない。

まあ、六歳では充分だとか詠春さんは言ってくれたが……

そうして1ヶ月の旅を終えて麻帆良に帰ってくる。たった1ヶ月だったがこの麻帆良の雰囲気が懐かしく思う。

そしてようやく家に戻ってきた。家の玄関を開けて大きな声でみんなに帰ってきたことを伝える。

「ただいま～！！」

俺の声に反応してみんなが玄関に集まってくれる。

「「「お帰りなさい！！」」」

こうしてみんなの顔を見ると帰って来たんだなと思う。

「疲れてるでしょ。食事は作ってるから、その時にお話しをきかせてね」

「無事でよかったよ。ゆっくり休んでくれ」

「涼く～ん、お話しいっぱい聞かせてね～」

俺のひと月の修行の旅は終わり、そしてまた麻帆良での毎日が始まる。

◇

次の日、図書館島に行きクウネルたちに旅の報告をする。

報告が終わると、エヴァが旅の成果を見たいと言って、チャチャゼロとエヴァの二人と戦うことになった。

目の前にはエヴァとチャチャゼロがいる。俺が構えるのと同時にエヴァとチャチャゼロが攻めてきた。

「“魔法の射手　氷の５７矢”」

「ケケケ、行クゼスズミ」

エヴァが魔法を放ち、チャチャゼロが一気に踏み込んでくる。

エヴァが放った“魔法の射手”を回避しつつ、チャチャに対してカウンターを叩きこむ。

旅に出る前の俺ではエヴァの“魔法の射手”を避けることはできな

かったし、チャチャゼロの攻撃にカウンターを合わせることはできなかっただろう

リーチの差でチャチャゼロにカウンターが決まり、チャチャゼロは後方に吹っ飛んだ。

「チャチャゼロ！！」

エヴァがチャチャゼロに気を取られているうちに“神斬の太刀”を展開する。

「弐の太刀“空裂き”」

そしてエヴァに向かって全力で“空裂き”を放つ。

“空裂き”は真っ直ぐエヴァに向かって飛んでいき……

「なにぃぃ！！」

チャチャゼロに気を取られて反応の遅れたエヴァに直撃する。その間に魔法の詠唱を始めた。

「来たれ地の精花の精、夢誘う花纏いて蒼空の下、駆け抜けよ一陣の風！！」

エヴァの姿が現れる。ダメージは直撃だったので通っているようだ。

「“春の嵐”！！」

「“断罪の剣”！！」

全力で魔法を放つが立て直したエヴァが“断罪の剣”で迎撃をされる。

俺の“春の嵐”とエヴァの“断罪の剣”は拮抗するが、徐々に均衡が崩れ俺の魔法が押されている。

高位の魔法はまだ覚えたてなのでやはり練度が足りなかったようだ。

結局魔法の撃ち合いは俺の敗北に終わった。しかし、エヴァは満足そうだった。

「確かに威力はまだまだだったが覚えたてと言うには上等だ。近接戦闘も私の“魔法の射手”を回避しながらチャチャゼロにカウンターを合わせられるほどレベルアップした」

「そうですね、年齢を考えれば異常なほどの力量です」

エヴァの機嫌は良い。クウネルもレベルアップした力量に満足しているようだ。

「魔法世界での戦闘経験がお前の力量を底上げしたんだろう。やはり、実戦が一番だな」

こうして旅の報告も終わり、俺の旅は終了を迎えた。

第9話　基礎は大切ですね（後書き）

作者は明日から少々忙しくなりますので、これまでのように連続投稿ができないと思います。

更新予定日はきちんと守りますので、これからもよろしくお願いします。

第１０話　見習いって思ってるよりダルい（前書き）

更新予定日は守れました。

第１０話　見習いって思ってるよりダルい

旅から戻ってきてから数日後、俺は学園長に呼び出された。

ちょうど休日であったため、女子中等部に行くまでの道のりは平日と比べ人が少なかったが、それでも部活動をやっている、女子中学生が数多くいる。

女子たちは女子中等部のエリアにいる俺を訝しんでいるようだったが、笑顔で手を振ると向こうも手を振り返してくる。

わざわざ、学園長に会いに行くために女子中等部に入らなければいけないというのはどうかと思う。

どこかの校舎に入らず、学園長専用の建物でも作ればいいのだ。

だいたい、俺のような男子は女子校に行くというだけでも恥ずかしい。

俺はまだ見た目は子どもだからいいが、もっと上の学生は肩身が狭くなるのではないのか。

なんて考えてみたが、学園全体に掛けられてはいる認識阻害のお陰でその辺は問題ないらしい。

認識阻害のお陰で普通に女子校に入れるとか、一般男性からすれば喜ばしい限りだろう。

まあ、麻帆良だけに限るだろうし、麻帆良の外では警備員に連行されるだろうけど……

学園長室までの道を優しいお姉さん方に聞きつつ、学園長室まで向かう。

途中、なんでここにいるの～？とか何をしに来たの～？などと話しかけられるが、学園長のせいにする。まあ事実なんだからしょうがない。

お姉さん方に話しかけられたせいで指定された時間を少しオーバーしているが何とか学園長室前にたどり着いた。

コンコンっと学園長室の扉をノックする。

「入ってよいぞ～」

「失礼します」

中から許可の声が聞こえたので、学園長室の中に入るとそこには学園長とあさぎ、そしてメガネをかけた男性がいる。

「よく来てくれたのう司条涼君、ワシはこの学園の学園長と関東魔法協会の理事をやっておる近衛近右衛門じゃ」

学園長は挨拶をしてくるが、俺は学園長の後頭部の凄さに驚き、挨拶が遅れる

こんな人間が人類に存在するんだ～。

「え～と、司条涼です」

こちらが挨拶すると、もう一人のメガネの男性が声をかけてくる。

「僕は高畑・T・タカミチ。ここにいる朝霧とは昔からの仲間で、『紅き翼』のメンバーだったんだよ」

高畑は挨拶をしてくるがわざわざ『紅き翼』を強調する意味はあるのだろうか。

なんというか子どもに自慢して憧れてほしいという風にも俺には見える。

『ちなみにタカミチはボクたちイレギュラーのことは知らないから♪』

あさぎが念話で伝えてくる。急なことで驚くが、どうやら高畑と学園長は俺が『紅き翼』に反応したように見えたらしい。

「やっぱり紅き翼には憧れる？」

「あっ、ええと、はい」

何言っているんだろうコイツ、などと思いつつもとりあえず肯定しておいた。

憧れていると言われたのが嬉しかったのか高畑は喜んでいる。

『あと言っておくと、キミはボクとエヴァの弟子ってことになっているから♪、それに二人はクウネルのことも君がラカンに会ったこ

とも知らないよ♪』

どうやら高畑は本当に何も知らないようだ。というより仲間にすら信用されていないらしい。

「君が浅葱君の弟子というのは聞いておる。それに浅葱君の進言もあってな、君を図書館島司書見習いにすることにしたのじゃ」

急に告げられたことに驚きを隠せない。

「なぜ、図書館島の司書見習いに？」

「ん？知らんかったのか？浅葱君は図書館島の司書を勤めておるのじゃ、他にも広域指導もやっておるぞ」

あさぎのことは知らなかったが、どうやらコイツの勤務先は図書館島らしい。図書館島が勤務先であればクウネルたちと研究ができるし、あそこにある魔導書関係も自由に扱えるからだろう。

上手く隠したもんだな、と思いつつ学園長に向き直る。

「わかりました。それで報酬は？」

普通の初等部の魔法生徒の場合、魔法先生からの指導を受け、侵入者と魔法先生が戦ったあとを元通りにすることで魔法の実習を行う。

あくまでも実習という名目なのでこの場合は報酬がでない。

しかし司書見習いの場合、魔法の実習となるのが身体強化ぐらいしかないので、魔法の練習機会が少ないのだ。

いくら俺がクウネルたちから指導を受けているとはいっても、不公平感がある。

というふうに学園長たちを説得する。

学園長たちは浅葱君から指導を受けているのだから……などとほざいていたが、あさぎも俺を擁護してくれたため、報酬がでるようになった。

ちなみに報酬は時給五百円で俺の学年が上がるたびに増えていくようにお願いした。

まあ、基本的に毎日図書館島には行くので、かなりの金額を稼ぐことはできるだろう。

学園長との話し合いが終わり図書館島に行く。その際腕章を貰った。どうやらこれが司書見習いの証しのであるらしい。

図書館島に着いてからは、司書の仕事についてあさぎに教えて貰う。

司書の仕事はまず本の管理や場所の把握、そして図書館島にいる人の安全を守ることらしい。

本の貸し出しなどは専門の人や学生がアルバイトでやってくれるため、その辺りの仕事は殆どないとあさぎは言う。

ただ、本の配置を替えたり、本が間違った本棚に入っていれば、それを元に戻したりするようだ。

あさぎは本と本棚に魔法を掛けて勝手に本が本棚に戻るようにしていると言っていた。

しかし、それは一部の本と本棚だけで、新しく入ってきた本などにも魔法を掛けなくてはいけないから結構面倒らしい。

ちなみに俺の仕事は図書館島の警邏と本と本棚に魔法を掛ける作業、そして本の整頓を行うことになった。

いくら魔法で本や本棚の位置がわかるとはいえ、整頓はかなり面倒くさい。

まあ、一日三時間程度で良いと言われたから三時間だけはきっちりと働く。

司書見習いとして働く傍ら、クウネルたちとの訓練も続いていく。

そんな、ある日のことだった。

クウネルたちに呼ばれ、図書館島の深部にあるクウネルの住処に行く。

そこには裕奈以外の目的に関わっているメンバーが全員揃っていた。

「来ましたか」

「どうしたんです？急に呼び出して？」

「珍しいな、わざわざ全員集めるとは……」

ここに呼び出されたメンバーが呼び出されたことに疑問を持ち問いかける。

いや、あさぎは何時も通りだから、集められた理由を知っているのだろう。

「実はですね、ナギの子どもについてです」

「生まれたのか!?」

「いえ、もう既に生まれています」

原作の主人公がもう生まれている。まあ時期的には全く不思議でも何でもないんだが……

「情報が遅かったな」

「はい、情報が隠されていて調べのに手間取りました。恐らく元老院への対策のためでしょう」

「しかし、遅かれ早かれ漏れることではないでしょうか?」

明石さんがクウネルに問い掛ける。元老院はナギやアリカ姫にあれだけ辛酸を舐めさせられたのだ、その子どもについてもマークはつけているだろう。

「そうですね。しかし、重要なのはそこではありません」

クウネルの言葉にみんなの緊張感が高まる。

そしてクウネルは口を開いた。

「その子どもは“双子”であるようです」

「なんだと!!」

俺はここで新たなイレギュラーが現れたことに驚く。

「まあまあ落ちついて♪」

あさぎの変わらない態度が気になった。

「どうしてそんなに落ち着いていられる」

「ん～♪どうしてって言われても予想はしていたし」

「予想していただと?」

なぜコイツはイレギュラーが来ることを予想できたのかわからない。

「うん♪だって今までいたイレギュラーを思い出してごらん♪」

あさぎに言われたので今までいた俺たちと同じイレギュラーを思い出す。

まずはウェントス。エヴァの兄で『完全なる世界』のメンバーだった奴だ。

次に『紅き翼』のイレギュラー。確かナギと同い年だったはずだが

もう死んでいる。

そしてあさぎ、『紅き翼』のメンバーで高畑と同世代。

最後に俺。裕奈たち、つまりは原作ヒロインたちと同い年である。

そして今回のイレギュラー。

「なるほど、わかったぞ」

そう、俺たちの共通点それは……

「イレギュラーは原作に登場する人物たちと同年代になるのか」

そう、俺たちイレギュラーは全員が原作キャラと同年代なのだ。

ウェントスはエヴァと、

死んだ奴はナギと、

あさぎは高畑と、

俺は裕奈たちと、

そしてその子はネギと、

全員が各世代に別れている。

「ちなみに新しいイレギュラーは女の子だよ♪」

「まだ、その娘が知識持ちなのかは確認できていません。もしかしたら知識を持っていない可能性もあります」

確かに今までがそうだったからといって次もそうであるとは限らない。

それにもし知識を持っていたとしてもソイツがどういう人間かわからないのだ。

「それに悪魔の襲撃の事もあります」

そう、元老院が仕掛けてくることも気にしなくてはならない。

「介入すれば村の人の犠牲は防げるでしょう、しなくてもおそらくこの麻帆良には来ることになります」

俺たちは決断に迫られる。介入するべきかしないべきか。

すれば村の人を助けられるが、介入することで元老院に目をつけられる可能性がある。

介入しなければ、村の人は石化する。当然何人かの犠牲はでるだろう。

「誰にも気づかれないように村人を助ける。見捨てるのは論外だし、気づかれて不利になるなら気づかれないようにすればいい」

俺の言葉にみんなは納得しているようだった。

まあ、実際自由に動けるのは俺とあさぎであろう。明石さんは学園

システムの管理があるし、夕子さんは一応関東に所属している。

あさぎも立場上自由に動けないがあくまでどこかの勢力に属しているわけではない。

もう一人、エヴァがいるが彼女は自由であるものの、悪名高くいろいろ面でマズいし、そもそも人助けに興味がない。

こうして俺たちは悪魔襲撃に対応することになった。

その方法であるが、まずクウネルがネギたちを遠見の魔法で監視、悪魔が来たらエヴァのゲートかあさぎの魔法具でイギリスに転移をする。

その後はあさぎの魔法具で姿を隠しつつ悪魔を退治し、可能ならばイレギュラーの子に接触し情報を引き出す。

そしてまた転移で麻帆良に帰ってくるというシナリオだ。

正直、上手くいくかはわからないが頑張るしかない。

こうして、俺たちの話し合いは終わり、また一日が過ぎていった。

第１０話　見習いって思ってるよりダルい（後書き）

原作開始までまだまだ先は長いです。

こんな作品ですが頑張って書いていきたいと思います。

第１１話　たまには息抜きも必要だと思う（前書き）

そこそこ片付いたので更新ペースを上げて頑張りたいと思います。

ゼミの交通費だけで今月一万円が飛んだ～～～

……泣きたいです。

第１１話　たまには息抜きも必要だと思う

あれからというもの、俺は小学校に通いながら司書の仕事をこなしつつ、さらにクウネルたちの修行を受けるというかなりハードな日々を過ごしていた。

裕奈もめきめきと魔法の技術が上達し、無詠唱でも魔法の射手ぐらいなら放てるようになっている。

原作でも裕奈は射撃が得意だったが、今の裕奈は魔法の射手で同時に二十個の的に命中させられるほど、魔法の射手をコントロールできている。

ちなみに俺は、魔法の射手を的に当てるのは苦手だ。

というよりも魔法の射手を数多く撃って狙った位置の周辺を攻撃をする方が多いので必然的にそちらの方が得意になる。

しかし、この前裕奈と魔法の射手だけの戦闘訓練を行ったら、こちらの矢は全て撃ち落とされて、俺は裕奈の矢を撃ち落とせずに負けてしまった。

こちらの方が戦闘経験も多いのに負けてしまったことでエヴァたちが地獄の特訓をやらされたことはいうまでもない。

どうやら俺は繊細な魔法のコントロールが苦手のようだ。

魔法の射手や紅き焔などの射撃訓練では、どうしても狙った位置か

ら少しズレてしまう。

これでは高位の敵が相手になったとき辛い。

まあ、魔法だけではなく接近戦もできるし、などと口を滑らしてしまったら、それをエヴァに聞かれてしまい、さらに訓練メニューが増えた。

エヴァが言うに魔法だけでもしくは接近戦だけでそれを得意とする人間に勝てるレベルにないといけないらしい。

つまり、短剣装備の近接戦闘だけでラカンや詠春さんに勝ち、魔法だけでエヴァやクウネルに勝てるレベルにならないといけないとのことだ。

いやいやいや、無理だろ。

あのバグキャラであるラカンや人外のエヴァの専門分野で勝てなんて流石に鬼畜過ぎる。

あれから一度旅行という名目でクウネルを除く全員で魔法世界に行ったが、結局魔法を使ってもラカンが相手では手も足も出なかった。

その後、リーチがもう少しあればそこそこ勝負にはなるとは言われたので多少は自信になったが……

ちなみにトサカさんとも戦ったがラカンに弟子入りしているからか、かなり実力を上げていた。ちなみに勝負は俺の負けだった。

……まさか、“春の嵐”を気合いで防がれるとは思ってもみなかっ

た。

あと、“神斬の太刀”はラカンにダウンをさせる程度には威力が上がり、さらにもう一つ新しい必殺技も得た。

この話しは後においておくとして、今、俺は裕奈と街に買い物にきている。

魔法の射手対決のときに賭けをしていて、俺が負けたら街に一緒に遊びに行くことになっていたのだ。

まあ、遊びに行くといってもまだ小学生だ。

デートと言うには程遠いし、ただ麻帆良の外に出ただけとも言える。

ただ、俺はそんな事も考えつかなかったので財布のなかには諭吉さんが三枚ほど入っている。

司書の仕事で稼いだお金だ。大体、時給が五百円、月に二十日、一日に三時間働くとして、２０×３×５００円＝３万円なので今持っている金額はひと月分の給料と同じだ。

まあ、学年が一つ上がるごとに時給の百円アップを約束させたのでこれからはさらに増えるだろうが……

裕奈はそんな事知らないから、様々な店を見てまわる。

それはおもちゃ屋であったり、服屋であったり、花屋であったり、本当にいろいろなところを見てまわった。

今は喫茶店に入って食事をしている。当然お金は俺が支払う。

流石に金持ってる人間が割り勘は恥ずかしいだろう。

裕奈はナポリタンとオレンジジュース、俺はサンドイッチとサラダ、あとはりんごジュースだ。

「涼くん、サンドイッチちょうだい？」

「はい、どうぞ」

裕奈は俺のサンドイッチを欲しがっているので、皿を突き出して渡す。

「う～ん、おいしい！！じゃあ涼くん、はいっ！！」

そう言って裕奈はナポリタンをフォークに絡め俺の口元に持ってくる。

「あ～んっ♪」

裕奈はここでもあ～んをやってくる。流石に店の中なので止めさせようとする。

「あ～ん」

「えと、裕奈？」

「……あ～ん」

どんどん尻すぼみに小さくなる声に罪悪感が湧く。

「裕奈、あ～ん」

流石にこれ以上はマズいと思い、口を開き裕奈に催促をする。すると裕奈は機嫌を直し

「あ～んっ♪」

と口の中にナポリタンを入れてくれた。周りからは生暖かい視線を感じる。

そのあとデザートを注文し食べる時も同じ事があったのは言うまでもない。

「そこのお嬢ちゃんたち、みていかないかい？」

食事が終わり、また街を散策して、ちょうど日が暮れて麻帆良に帰ろうとしている最中に声を掛けられる。

どうやら露天商のようだ。地面には箱に飾られた様々なアクセサリーが置かれている。

「涼くん、これキレイだよ」

裕奈が指輪やネックレスなどを見て目を輝かせている。

よく見てみると、ここにあるアクセサリーには魔力が込められていた。

たまに魔法使いの道を諦めた人がこうやって露天で魔法具を売るというのは聞いたことがあった。

そういった魔法具は一般人用にほんの少し幸運に恵まれたり、縁に恵まれたりする術式が刻まれているらしい。

俺は魔法具に関してはそれほど詳しくないので、どんな術式が刻まれているのかはわからない。

ただ魔法具だし、嫌な感じはしないので買ってみることにする。

「裕奈どれか欲しいのある？」

すると裕奈は近くに飾られている指輪を指差した。

「ん～、これがいい！！」

「じゃあこれと、あとお揃いの隣の奴を下さい」

「はいよ、二つで四千円だ。お嬢ちゃんたちの指には入らないだろうからチェーンもオマケしてあげるよ」

そういって、露天商は俺たちにチェーンを通した指輪を渡してくれる。

「裕奈、ちょっと後ろむいて」

裕奈に後ろをむかせて、チェーンを首につけてあげる。

「はい、できたよ」

裕奈は首元にある指輪を握りしめ嬉しそうにしている。

そして俺のやつは裕奈がつけてくれた。

「ははっ、仲がいいんだな。じゃあさらにオマケしてやるよ」

露天商はそう言ってさらにオマケを俺たちに渡してくれる。

裕奈には陶器のようなものでできた白い雪の結晶がついてある髪留めが渡され、俺には同じようなネックレスが渡される。

俺たちはそれをポケットにいれて、露天商にお礼を言って帰ることにする。

「ありがとうございます」

「ありがとー」

そして裕奈の手を引いて帰る。

ふともう一度、露天商の方へ振り返るとそこにはもう既に露天商はいなかった。

あまりに消えるのが早過ぎるのでおかしいと思ったが、もう日が暮れているので、急いで帰ることにする。

「ねえ、涼くん」

「なに、裕奈？」

「大きくなったら、私が涼くんの“魔法使い（ミニステル・マギ）の従者になるから」

裕奈の宣言に驚いたが同時に嬉しくもあった。

「うん、喜んで待ってるよ」

こうして裕奈との休日は終わった。

◇

裕奈との休日が終わり、久しぶりにあさぎに訓練をつけて貰っている。

基本的にあさぎは俺の訓練には参加せず、魔法薬などで俺を回復させるのが主だ。

「いくよ～♪発動“雷の暴風”！！」

あさぎは手に持ったカードに魔力を込めるとカードは魔法となって、俺を襲う。

「“氷楯”！！」

俺はすぐに“氷楯”を展開する。“雷の暴風”は“氷楯”にぶつかるが貫通するには至らない。

「発動♪“雷の斧”」

しかし、いつの間にか接近していたあさぎに“雷の斧”を当てられ、たまらず倒れ込んだ。

「ボクに勝つにはまだまだだね～♪」

「いやいや、流石に無詠唱で“雷の暴風”がとんでくるとキツいって」

確かに相手の戦い方に文句を言っても仕方がない。

あさぎの戦い方、それはカードを使った戦い方だ。

「だってそれがボクの戦い方だし♪」

陰陽道の呪符と魔法の巻物の技術を応用し、カードに魔法を込めることで即座に発動する事ができる。

メリットとしては即時発動、魔力消費をしない、誰にでも使えることだ。

デメリットは作ったカードの魔法しか使えないこと、使いきりの消耗品ということ、そして、普通に放つより威力が数パーセント落ちることだろう。

魔法使いにとって即時発動の恩恵は高すぎる。しかしコイツの場合、カードなんて使わなくてもエヴァと撃ち合いが行えるほど強いのだ。

一度何でカードなんか使っているのか聞いたことがある。

そのとき、あさぎは

「だって詠唱ってめんどくさいし♪　あとスペルカードっていいよね♪」

とほざいた。というか東方かよっ！！と突っ込みたくなったが、こっちでも呪符や巻物などがあるから別に今更だなと納得しておいた。

「まあ、魔法戦闘もそこそこできるようになってきたね♪」

「まあ、お前らに教わっていれば嫌でも上達はするだろ」

あさぎたちともそこそこ戦えるようにはなった。

勝ち星こそないが、全力戦闘であればあさぎとエヴァ相手に引き分けに持ち込んだこともある。

まあ、油断しているところに魔法を撃ち込んでようやく得た引き分けだったが……

「アハハ♪まあ、師匠がいいからね♪伸びて貰わないと困るよ♪」

あさぎは笑顔で言うが、正直まだまだ俺の実力は足りないと思う。

「ボクたちには目的があるからね。それを達成するためにはどんな敵にも勝てるようにならないといけない」

コイツと一緒にいて気づいたことがある。あさぎの何時もの元気は割と無理してやっているところがあるということだ。

確かに昔はこれが自然体だったんだろう。

しかし、大戦が終わってからは少し違和感があるとクウネルが言っていた。

俺に会ってからは少しずつ、悩みや本音を話すようになったらしい。

「気負ってもしょうがないだろ。結局できることしかできない。だからできることを増やすために今を頑張るんだろ」

「くす、生意気だよ♪涼クン♪」

そう言ってあさぎは俺にでこぴんをする。その笑い方は自然だったと思う。

第１１話　たまには息抜きも必要だと思う（後書き）

どうせなのでクリスマス用にアンケートを取りたいと思います。

クリスマスに番外編をアップしたいので、みなさんが好きなヒロインを一名、感想にお書き下さい。

アンケートは１２月１３日まで取りたいと思います。

原則一人一票でお願いします。

第１２話　その感情は……（前書き）

新たなオリキャラ登場です。

あとがきにてアンケートの説明をやっています。

第１２話　その感情は……

◇

それは唐突に始まりました。

何時も通り私は学校が終わり、帰宅して家族と夕食を食べてお風呂に入り、部屋で雑誌などを読んだあとベッドで寝る。

そんな、何時も通りの変わらない何処にでもあるような平凡な一日を終えたはずでした。

次に目を覚ました時には知らない人たちに囲まれていました。

「よかった！無事だったのね！！」

金髪のキレイな女の人が私を心配してくれています。

彼女は明らかに外国人でした。

あれ、何で英語を理解できたんだろう。

私は自慢ではないですが語学は苦手でした。

しかし、彼女の喋った言葉は英語だったんですが、意味も分かりましたし、英語自体が頭の中で理解ができます。

ですが、何故か身体が熱っぽく、頭痛が酷い状態なので深く考える

ことができません。

「……あなた達はだれ？」

彼らに伝わるように何故か話せるようになった英語で話しかけます。

「ワシらのことを覚えておらんのか？」

「私のこともわからないの？」

「……だれ？」

立派な髭を生やしたお爺さんや先ほどの女性が聞いてきますが、知らない人のことはわかりません。

意識が朦朧としていますが、周りの話し声は聞こえます。

「どうやら、湖に落ちたショックで記憶が無くなっているみたいだ。まあ四十度の熱もあるし、ゆっくり寝かせてやると良い」

「どうやら、ぼーずが湖に飛び込もうとしたのを止めて自分が落ちたようじゃ」

「ぼーずも今回ばかりはイタズラがすぎるぞい、フツーの人間なら死んどるぞ」

どうやら、私は湖に落ちて熱を出しているようだった。なら、この体調の悪さも納得がいく。

「ぼーずはどこじゃ、ちょっとお灸を据えてやらねば」

「まあまあスタンさん、坊主も悪気があったわけじゃないですし」

「お主たちはぼーずに甘いわい」

周りにいた人たちの会話が終わり人影が少なくなる。

「アリサ、ゴメンナサイ」

いつの間にか隣にきた子どもが私の名前を呼ぶ。その顔はなんだか不満そうだ。

しかし、何故私の名前を知っているのだろう。

「こらっ！ネギっ！！ちゃんとアリサに謝りなさい」

「だって、ネカネお姉ちゃん」

「だってじゃないでしょ」

しかし、ネギと呼ばれた子どもは私に謝るのが嫌なのか走り去っていく。

私の意識はもう限界だったのでその日はそのまま眠りについた。

何日か経ち、ようやく動く事ができるだけの体力が戻る。

見舞いに来てくれた人たちの話しを聞いていると、私は記憶喪失だと思われているようです。

そして、私の名前はアリサ・スプリングフィールドというらしい。
鏡を見て驚いたのが自分が外国人になっていたことでした。

あと、兄の名前はネギと言うみたいでした。

ネギ・スプリングフィールド

私はその名前に覚えがありました。確か兄の持っていた漫画の主人公の名前です。

どうやら私は彼の妹となってしまったようでした。

私が熱を出していた原因は父を呼ぼうとしてネギが飛び込もうとしたのを私が助けて、代わりに私が湖に落ちたようです。

私はその漫画を内容はあまり覚えていませんが、確かそういうシーンがあったように思います。

身体が治った後は近所の人たちに挨拶に行きます。

皆さんは私が記憶喪失ということを信じているみたいで、随分と心配してくれています。

そして、ひと月がたったある日のことです。

その日は私がこちらで始めて会った金髪の女性ネカネさんが帰ってくる日でした。

ネカネさんは従姉妹であるらしく、手紙を何度か送ってくれ私のことについて教えてくれました。

また会えると思い、話しを聞こうと思って到着を待っていたのでしが、外が騒がしいので出てみました。

すると、そこにはバケモノがいました。

「嬢ちゃん早く逃げろ!!」

「こっちへ!!早く!!」

そう言われ、私は何時もお世話になっているパン屋の夫妻とその子どもで私と仲のよい女の子と一緒に逃げます。

森の中を走って逃げますが、足場が悪く躓いて転んでしまいます。

「ＧＹＡＡＡ!!」

すると目の前に悪魔が現れました。悪魔は口を開くとそこに光りを集めます。

「危ない!!」

怯えて動けない私と悪魔の間にパン屋の夫妻が割り込み私を庇います。

そして悪魔の放った光を浴びて石になってしまいました。私と仲がよかった女の子も同じです。

石になっていない私に悪魔が近づいてきた時、私の目の前を強い力の奔流が襲いました。

悪魔はそれを喰らい消えていきましたが。さっきの力は石化したパン屋の一家も襲っていました。

私はすぐさま彼らを探します。そして彼らは見つかりました。

――――コナゴナになって

「いやあああああ！！！！！！」

私はコナゴナになった彼らをまともに見れませんでした。

そして襲いかかってきた力の発信源を見ます。

するとそこにはネギとローブを着た人間がいました。

――――アイツガヤッタ

――――アイツガアノ人タチヲ殺シタ

そう気づいたときにはそのローブを着た人間に殴りかかっていました。

隣ではネギが気絶していますがそんな事はどうでもいい。

私は目の前のローブにあの人たちの敵を討つことしか考えられませんでした。

しかし、そいつは私のお腹に拳をいれます。

そして、なにやら私に魔法を掛けました。

そして、すまないという言葉と共にそいつは消えていきます。

必ず殺してやる。私は薄れゆく意識とともにそう決意しました。

◇

クウネルから悪魔を確認したと聞き、急いで転移する。

しかし、あまりにも長距離すぎるためか目的地よい数十キロ離れた位置に転移した。

浮遊術を使い、急いでネギの村を目指す。

そして俺たちはあさぎの作ったコートを身に纏う。

このコートは着た人のことがわからなくなる認識阻害の他、様々な防御術式が刻まれてある高性能なものだ。

場所を知っているあさぎの先導で村に到着するが悪魔の数が多すぎる。

俺とエヴァとあさぎでかなりの数を倒したがそれでも減ったとは思えないほどいた。

確かに街に被害を出さないために範囲攻撃などは使っていないが、それでも最強クラスが二人いるのだ。殲滅速度が遅いとは思えない。

「どこかでコイツらを召喚している基盤がある筈だ！！潰してこい！！」

「ならボクが行くよ！！」

エヴァの言葉に即座に反応してあさぎが動く。

「私たちはコイツらを全て倒せばいい！！」

「わかってる！！一気にいくぞ！！」

気合いを入れ直し、身体強化の出力を上げる。そして悪魔に突っ込んだ。

どれくらい悪魔を倒しただろうか、今も短剣を思いきり横薙ぎし悪魔を屠る。

すると先ほどまでより数が明らかに減っている。

どうやらあさぎが召喚の元を破壊したらしい。

すると魔法が村の中を突き抜けた。

「“雷の暴風”だと!?」

「まさか村の中で範囲攻撃をするなんて」

いや、原作でナギ・スプリングフィールドがやったのは覚えているが、俺たちが介入して今は敵の数も少なくなっている筈だった。

なのにわざわざ村の中で被害が拡大しそうな魔法を使うとは……

すると村のはずれから膨大な魔力を感じる。

「エヴァ!!」

「ああっ!!お前が向かえ!!」

エヴァに言われ感じた魔力の方へと向かう。

俺がついたときには子どもが二人と石化された老人。そして女性が一人いた。

男の子が杖を持っていることから、これがネギだろう。

するとこの女の子の方がイレギュラーであるはずだ。

しかし、女の子は気絶しており話しを聞けそうな状態ではない。

それにこの女の子からはネギとは違い微弱な魔力しか感じなかった。

女の子をよく見ると頬に涙の跡があった。

俺は女の子を抱きしめる。

「ゴメン、遅くなってゴメン。間に合わなくてゴメン。助けられなくてゴメン」

俺は涙を流しながらこの娘に謝る。

恐らくこの娘は大切な人を亡くしたんだろう。

あと少し来るのが早ければ助けられたかもしれない。

あと少し俺が強ければこの娘は泣かないですんだかもしれない。

「う、ん」

腕の中で女の子が少しだけ目を開ける。

「……何もできなくてゴメン」

俺はこの娘にそれしか言うことができなかった。

そして、そんな自分が悔しかった。

◇

誰かの腕の中で目が覚める。そこにいたのは今の自分より少し年上の男の子だった。

男の子の目から涙が落ちる。

「……何もできなくてゴメン」

男の子は悔しそうな表情で言う。

よく見てみると男の子は傷だらけだった。

逃げてきたのか悪魔と戦っていたのかはわからない。

でも今はこの腕の温かみが気持ちよく、また私の意識は落ちていった。

◇

腕の中でまた少女が眠りにつく。

するとあさぎとエヴァが近寄ってきた。

「その娘が？」

「ああ、そうだと思う」

「そろそろ応援が来る。引き上げるぞ」

腕の中の少女を地面に下ろし、エヴァたちに近づく。

「では戻るぞ」

そしてエヴァがゲートを使い、俺たちは麻帆良に帰った。

今回の件は俺にとって苦い思い出となる。

今日ほど悔しい日はなかった。

今日ほど自分の無力さを感じた日はなかった。

自分に力があればもっと被害が抑えられたかもしれない。

そう考えると自分が惨めでしょうがなかった。

第１２話　その感情は……（後書き）

クリスマス番外編のためにアンケートをしています。

自分が好きなヒロインを一人、感想に書いてください。

投票の多いキャラクターとの番外編を作者が書きたいと思います。

投票数によっては本編のヒロインへ昇格するかもしれません。

ぜひ、アンケートにご参加ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3073y/

魔法先生ネギま！？　～願い事は叶えられますか？

2011年11月28日06時57分発行